

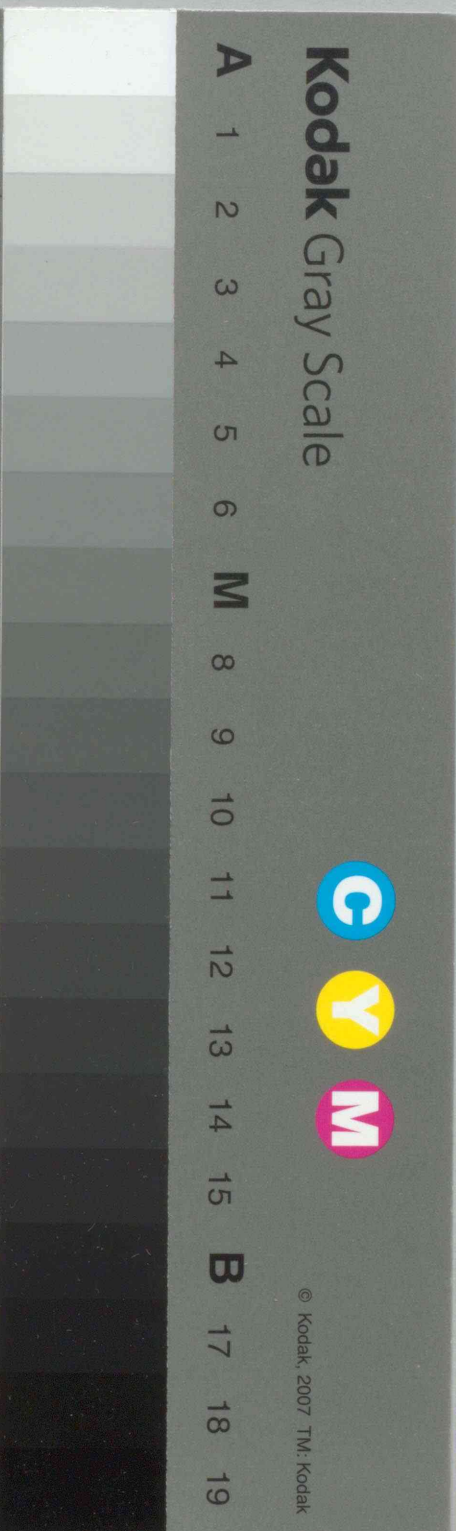
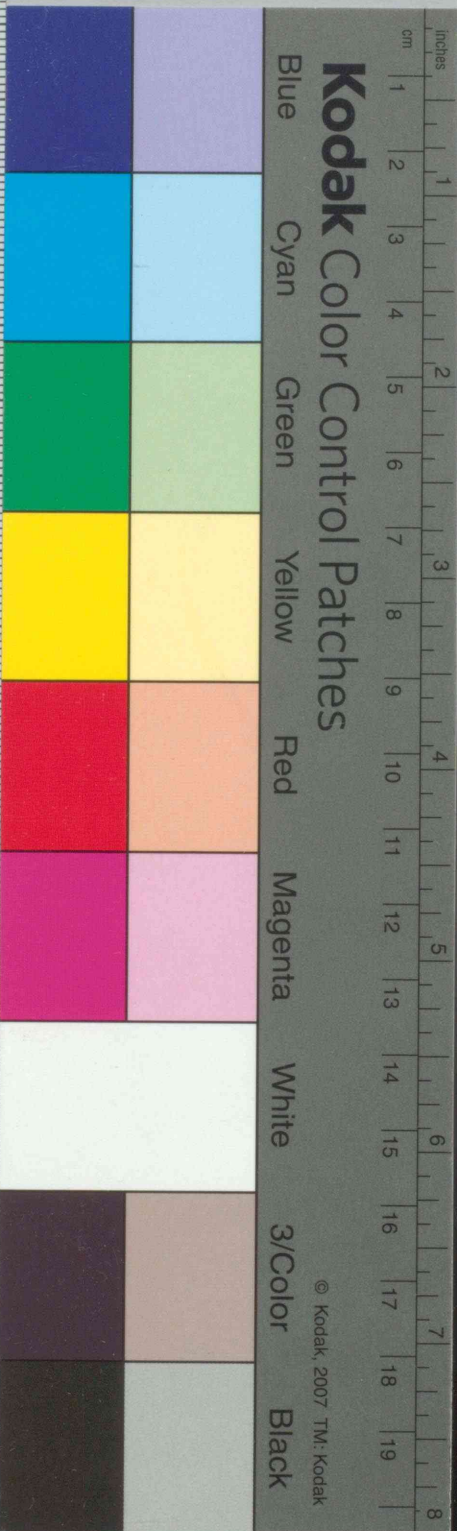
師範學校

國文教科書

本科用

卷一

3759
Y019
資料室



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42564

教科書文庫

4
810
51-1909
20000 39919



3759
Y019

資料室

文部省檢定
師範學校國語教科書
明治二十四年三月八日

吉田彌平編

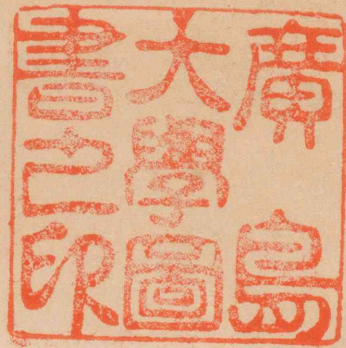
本科用



師範學校
國文教科書

東京
光風館藏版

卷



緒言

一本書は特に師範學校第一部本科の國文教科書に充てんがために現行の規程に基づきて編纂せるものなり。

一本書六卷を通じてその中心たるものは普通文にして、口語文、候文、古文及び韻文を適宜之に配合せり。

一本書は國文學史の大要を知らしめんがために、各時代の代表的作物につきて數章を節録し、且上級の卷に於て各時代文學の特色を槩説せり。蓋し現行の規程は文學史の目を存せざるにより、讀本中に於てその一斑を示し、時代思想の變遷を知らしむるを必要と認められたるなり。

一本書は普通の讀本と同じく有用の知識を與へ、高雅の感情を養

ふべき材料を收めたるが上に、更に本書特殊の目的に適合せしめんがために、(一)教育的興味を鼓舞し、教育者たる信念を堅固ならしむべきもの、(二)國語を愛好し、文學を鑑賞し、國語の諸問題につきて公正なる見解を有せしむべきもの、及び(三)向上の精神を養ひ、修養の興味を感じ、勇猛不退轉の道德的勇氣を起さしむべきものを採録したり。

一 地圖・繪畫の類にして本文の理會に必要なものは務めて之を挿入せり。その肖像筆蹟を掲げたるは聊以て古賢を仰慕し、先哲に私淑する所あらしめんの微意のみ。

一 本書の送假名は大抵國語調査委員會の所定により、句讀點は文部大臣官房圖書課の立案により、外國の地名人名の稱方は嘗て

文部省に設けられたる取調委員の報告による。要するに、近く改正せらるべき國定教科書とその步趨を一にせんことを目的とし、務めて私意臆斷の弊を避けたり。蓋し教科書を以て自家の主張を示す具とするの非なるを思へばなり。

一 分別書方が將來我が國の普通文に實行せらるべきものなりや否やは姑く之を措き、現に小學校初年の讀本には必要上之を實行せるに徴し、本書は文部大臣官房圖書課の立てたる分別書方案によりて一二の短篇を假名書にし、以てその模範を示したり。

一 每章題目の下に作家の氏名又は氏號を記し、文末に出所を注す。その或は名を用ひ、或は號を用ひたるはまたたゞ通俗の稱呼に従へるのみ。抑、諸家の文、自ら諸家の法度・風格あり。然れども

之を教科書中に採録するに當りては、勢、多少の改修を加へてその體例を一にせざるを得ず。而して改修の甚だしきものに至りては、單にその出所を注するに止む。僭妄の罪、避くべからざるを知ると雖も、また固に已むを得ざるに出づ。是、編者の深く諸家に謝する所なり。

明治四十一年十一月

師範學校 國文教科書本科用卷一

目次

一 教育者たらんとする青年に
與ふ(候文)……………一頁

二 千里の春……………大和田建樹 五

三 春の海(韻文)……………幸田露伴 一三

四 捕鯨記その一(口語文)……………一五

五 捕鯨記その二(口語文)……………二三

六 音訓……………三四

七 讀書……………坪内逍遙 四三

八 杜鵑を聞く……………瀧澤馬琴 四

九 「世界之無線電信」の著者に贈
る(候文)……………島村速雄 四

一〇 日本海の手戦その一……………新保磐次 五

一一 日本海の手戦その二……………新保磐次 五

一二 日本海の手戦その三……………新保磐次 五

一三 せめては草(韻文)……………森 鷗外 六

一四 雑草……………幸田露伴 六

一五 梅雨……………徳富蘆花 七

一六 我が幼時……………新井白石 六

一七 舊師に特殊學校の模様を知
らす(口語文)……………五

一八 稻葉一徹(國漢文對照)……………湯淺常山 六

一九 笑話三則(口語文)……………一〇二

二〇 岩倉右府その一……………井上 毅 一〇五

二一 岩倉右府その二……………井上 毅 一〇三

二二 格言……………一三三

二三 良夜……………徳富蘆花 一三五

二四 動植二物配合の美(口語文)……………三好 學 一三六

二五 露月に答ふ(候文)……………正岡子規 二五
 二六 歌話……………中邨秋香 二四
 二七 忘れられぬ人物(口語文)……………新渡戸稻造 二四
 二八 禁庭の野分……………一五
 二九 加藤清正の告別(韻文)……………大町桂月 一五
 三〇 北京……………市村瓊次郎 一七
 三一 天理と人道……………福住正兄 一六
 三二 四季の月(韻文)……………石川依平 一七

師範學校
 國文教科書本科用卷一目次終

師範學校
 國文教科書本科用卷一

一 教育者たらんとする青年に與ふ

春嶺君足下。方今天下の人心漸く實利に傾き、海
 内の青年争うて功名に走る時に際し、足下の如き少
 壯有爲の士が來つて此の名利に縁遠き教育界に投
 ぜられんとするは、百萬の援兵を得たるにも増して
 老生の意を強うする所に御座候。足下をば春秋に
 富む。勉めて怠らざれば今後の造詣測られざるも

一 教育者たらんとする青年に與ふ

學業深く入るべし



献獻

荒蕪—草をよみまきつゝあれ
はてあつこと

のあらん。老生は之を思ひて喜悅の情に堪へず候。
教育の事業が人世に貢獻する所の如何に偉大なるかは老生の呶々を待たぬ事に候。世のあつこと 荒蕪を拓き、道路を修め、公園を造り、病院を設くるが如き、いづれも人生の福利を増進する事業に候へども、別して教育の事業に至つては、一層直接にして且一層痛快なるものに候。何となれば、彼はたゞ人間社會の情態を改善するに過ぎざれども、此は直に人間そのものを改善するものに候へばなり。人間にして改善せられんか、人間社會の情態は自ら改善せらるべき筈に

候。

世にはまた教育事業の困難を訴へ、遂には教育者の任務を退避せんとする者さへこれあり候。かゝる人に向かつては、老生は「凡そ世の中に何の事業かよく困難なくして成し得るものぞ。」と反問いたしたく存じ候。勿論、教育の如き高尚なる事業に、少からぬ困難の存するは免れ難き事に候。俗をほろめればかきこと さりながら、日日の事業に伴ふ快樂は優にその苦勞を償ひて餘ある事と存じ候。足下試に思へ、教育者の活動する範圍は天真爛漫、清淨無垢なる小國民の世界に候は

天真爛漫
飾らばなく自然のまゝなること
清淨無垢

ずや。花を養ふ者は花に對して身の煩を忘る。我等は我が兒童を一見したるのみにて、既に一切の苦惱を忘るゝ事に候。實にや活潑なるは兒童なり、愉快なるは兒童なり。兒童の世界こそはこの世からなる樂園にて候へ。日夕、兒童に接するものはその身そのまゝとこしなへに兒童なり、老のその身に迫り來ることは絶えてあるまじく覺えられ候。

老生は足下が志を立つることの時流に抜き出でたる所あるを感じ、豫め前途の成功を祝し候。なほ追々卑見を申し進ずべく候。不具。(教育者の教師に據る)

二 千里の春

大和田建樹

春晴千里。山また山、水また水。水は澄みて山の緑をうかべ、山は霞みて水と共に藍をながす。此の間の一線を曳くものは何ぞ。一列の汽車、今や東京より東海道を下りゆくなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、抑、畫か。

七砲臺邊、波穩にして、群れ飛ぶ鷗、落花の風に飄るに似たり。帆を半ば張りて出でゆく船あり、櫓をあ

西風

鷗

やつりて横ざる舟あり。房總二州の山は霞に消えて、視れども見えず。

松青きところ、桃の花紅なり。藤澤の野、山北の谷、人ごとに唯美しと呼ぶ。

三保の松原煙り渡りて、春は畫の如し。磯に碎けて折れ返る波、波路の末に浮き立つ雲、何物か造化の

妙筆に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆影は動か造物

んともせず。勝つる筆杳としてほの見ゆるは伊豆なるべし。

富士は水彩もてつくれる畫の如く、窓の右に立ち、又左にあらはる。

杳として

三尾の平原、麥は緑に、菜種は黄なり。熱田の社を左に見て、春風に吹かれゆけば、名古屋の城はまがはぬ影を見せたり。田夫は金の鯨を背にして妻と語り、行商は旅宿の可否を評して我が好む方へと人を勧む。

彦根去り、草津來り、煙は早くも瀬田川に横たはりて、京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡はいづれの處ぞ。問へども、答へず。尾利義政霞にたゝまるゝ遠近の山

影、或は淡く、或は濃く、鳩の浦風、波に眠りて、粟津の松原ひとり昔を語り顔なり。

朝日將軍

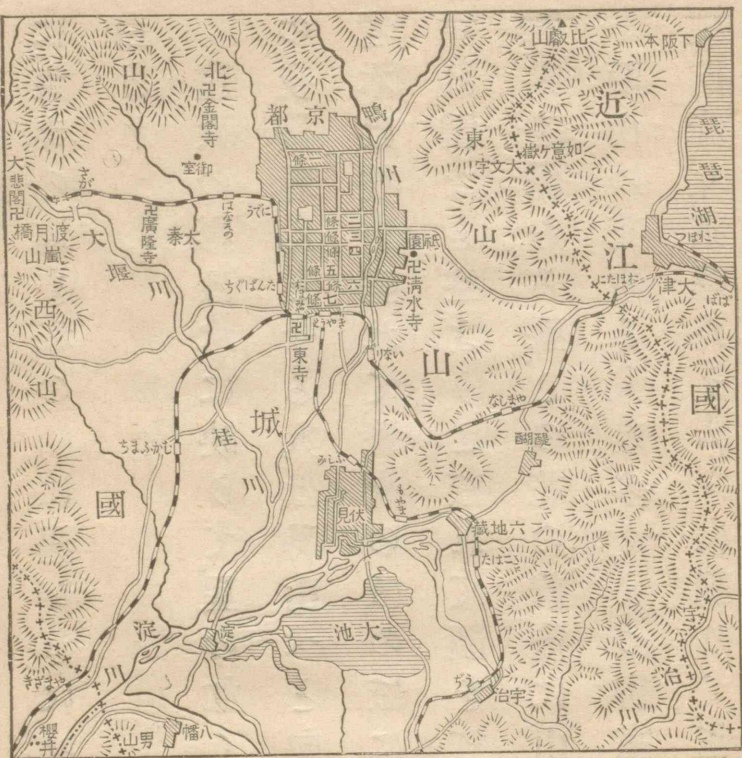
*琵琶湖の異名、近江國野洲郡、邇保郷より出づる名といふ。

著者

東寺の塔は我を待ちて立ち、鴨川の水は我を迎へて歌ふ。最愛の母にあひなつかしき父と語るに似たるは、いつも京都に著きたるときに心地なり。

山紫に、水明らかなるところ、たゞ夢のごとく、現のごとく、三條をわたり、四條をわたること、日に幾度ぞ。躑躅を柴に折り添へて戴き連れたる大原女も、いつしか我が友となれり。如意嶽より吹き來る春風は軽く我が袖をはらひて、行くへは遙に堤の柳の糸にあり。

花に誘はれて佛にまうで、佛に導かれて花を見る



餅めせ。など呼ぶ。しばし息みて、眺めわたせば、淺黄

客けふも清水觀音の堂前をみたしぬ。舞臺の上より見おろす人舞臺の下より咲きほこる花、あたかも一幅の四條畫なるに、姥は此の間に立ちて、蕨

四條畫—田のたき等の門人
早春より始まるる雪は、
水

に、藍に霞みわたれる八幡山崎のあたりもゆかしきに、東寺の塔を松の間に墨がきにせる筆の力こそ面白けれ。

燈火の影は水に映りて、星の如く、花の如し。祇園の夜櫻看んとする人は神山へと向かふ。一もとの老木は枝を垂れて、篝火のほのほに護られ、寒からぬ雪は雲なき空よりこぼれて顔を打つ。田樂を賣る聲、茶を勧むる聲、この花の前後に山彦を反し來る。西山の花看る人は、多くまづ御室を指す。松緑に、樓門赤く、茶煙たえぐに颺りて、花きはめて白し。

塔は霞をもれて松風の外に聳え、鐘樓は昔を説きて香雲の中に包まる。誦經の聲遠く響きて、鶯の歌高き梢にあり。

かさなる岩根をふみしめて生ひたつ松、その間を點綴して咲き誇る花、嵐山の春こそ今酣なれ。小舟漕ぎゆく人あり、岸の此方に眺むる人あり。水清く岩を洗ひて玉と碎け、山白く煙を離れて空にかよふところ、此の美は彼の美と相映じて自然の彩色をなす。阪を登りて大悲閣に至れば、眼下にひろげらるゝ一幅の圖、柳櫻をこきまぜて、さながら西陣を織

り出せるが如く、又友禪を染めなせるが如し。
途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。夕陽しづかに
鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。茶店あれども、客
來らず。少女は落花を風に任せて眠り、兒童は門の
仁王に紙礫を打ちつけて去る。

暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やうく、鴨川に
襲ひ來れり。清水の塔も半ば隠れぬ、大文字も姿を
隠しぬ。紫に、紅に、藍に、墨に見るく、色どられゆく
山影、淡く、濃く、青く、黒く、消え行く人影、いづれ詩中の
ものならぬはなし。天地たゞ平和、四圍たゞ寂寞。

かへりみすれば西山もなく、北山もあらず。(雪月花)

○

大堰川の川邊におりゐて、春の日もやゝく
れて、花の色ほのかなり。月霞みながらさ
して、いはん方なく静けし。小澤 蘆庵

大堰川、月と花とのおぼろ夜に

ひとり霞まぬ波の音かな。(六帖詠草)

三 春の海

幸田露伴

未明

孤鷗
濤標

まだきの海の、雲鈍くして、

潮動かず、東風力無し。

孤鷗長夜の、闇を侘びしみ、

鳴いて羽たたく、濤標の上。

日出

空飛ぶ鷗、鳴く音清らに、

物もなき海、朝嵐吹く。

雲紫に、流れ流る、東。

日は紅に、燃えくくして昇る。(東亞の光)

四 捕鯨記 その一

明治三十九年*

四月十八日午前九時、余は韓國蔚山に於て、捕鯨汽船ニコライ丸に乗り組んだ。やがて、拔錨。船は北の方鬱陵島を指して進む。これから約百三十哩。

この船はもと露國の捕鯨船であつたが、三十七八年戦役の初に、海上の偵察をした爲、我が海軍に、捕獲されたのである。鋼鐵製。噸數百二十。速力八節。乗組十六人(船長一、砲手一、機關長一、甲板部五、機關部五、賄部三)。

見た所は水雷艇とランヂとの間の形であるが、誰

ランヂ

偵察

にも目につくのは舳の捕鯨砲である。砲の中に六尺餘の鋼鐵製の銛が嵌めてある。銛には徑五寸二分からの太綱が結び附けてあつて綱の一端はウインチに巻かれて三百六十尋までは延すことが出来る。砲を撃つ銛が飛び出す、當れば爆發して鯨の體内で銛の先が錨の如く開く。綱がついて居るので、切れぬかぎりには逃すことはない。鯨が弱つた處で、ウインチで巻き戻すといふ仕掛。

この日は夕方まで鯨の影も見えぬ。夜の九時からは、火を消して機關の運轉をやめ、日本海の暗黒の

中に、船はそのまゝ流して、船員一同眠に就いた。「この風、この潮の狂ふ中に、船を流して置くのか。心細いことだ。」などと考へて居るうちに、いつしか疲れて、余の腦も全く運轉を止めてしまつた。

翌日眼の覺めたのが八時頃。船はもう進行して居た。昨夜は十湮流されたとか。忽ち聞く、ボーイの聲。「見えました」。余は夢中で、階子を走り上つて甲板に出た。

見れば、左舷四五十間の處で、高さ二丈ばかりも潮を噴き上げて居るものがある。其の壯觀。敷設水

紺碧

雷が爆發したかと疑はれるばかり、海水は空高く衝き上つて、それが忽ち散亂するのである。見て居る間に、かれは忽ち背を隠して、海中深く没してしまつた。あとは唯渺漫たる大海原、紺碧のものと色。

砲手の諾威人は余のより二倍もある大きな手を砲の把手へ掛けて、上下左右に動かして見て、靜に機會を待つて居る。どうしても大きな處がある。「鯨に同化した海の人だ。」と余は竊に思つた。

九時十五分に再び鯨は浮いた。が、餘程遠い。砲手は「全速力」を傳へた。が、近寄る間には沈んで了つ

た。何處へいつたか、分らない。

十時に、また浮かんだ。今度は餘り遠くなかつた。「徐行」暫くにして「最徐行」。忍足といふ見え。満船、咳一つすら遠慮して居るのである。此の靜さを破つて、鯨の潮を吹く音ジュン。これが大強音の響を以て、不意に鳴る。大喝一聲、海の神から叱られた様な氣がするのである。もう程なく射距離に入ると見た間に、また沈んで、行方知れず。

前と思へば後、右と見れば左、遠く、近く、其の定めがたさ。「全速力」「半速力」「徐行」「最徐行」「右に」「左に」など

鬱鬱

砲手の指揮は、あるひは手眞似で、あるひは傳話管に口を寄せてなど、苦心のほど察すべしである。が、とかく追ひまはして居る間に、残念ながら鯨を見失つてしまつた。余の失望、船員の失望。「砲手は」と見れば、平氣である。

船は全速力を以て進航し、鬱陵島より南西二十四五哩といふ處に達した。忽ち叫ぶ、檣樓の船長。「鯨羣、鯨羣」。時に午後零時四十分。

果して、前面一哩程の處に鯨艦隊の大運動を見出した。船員の顔は見る間に輝いた。どれから取つ

てよいか、さすが迷ふであらう。と見れば、かゝる時にも平然として居るのは砲手。どうしても此の人は鯨に同化して居る。

一時十分、鼻の先に一頭の巨鯨が浮かんで、檣より高いかと疑はれる程、海水を噴き上げた。今こそ時である。砲手は少しも狼狽せず、ストップエンデ停止を傳へた。船は情力で行く。

知るや、知らずや、巨鯨は一寸潜つては浮き、潮を噴いては潜り、今三回目を潜つて浮かばうとする一刹シヤッ那、此所ぞとばかり、かの砲手は、引金に指を掛けた。

轟然一發。忽ち砲手は白煙の間に隠れ、巨鯨は白浪の裡に没して、船も無し、海も無し。

此の時、檣上に聲あり、「無効」。これは船長の報告である。白き煙が消えると、かゝる時にも平然たるは砲手である。

此の時、既に船長は檣の上から飛鳥の如く降りて来て、第二の銛を仕込むべき命令を傳へた。

準備は出來た。けれども、さきの砲聲で、鯨は逃げ去つた。うらうと心配して見ると、どうして、鯨の羣は平氣で以て、彼方にも此方にも泳いで居る。こ

れは今餌について居るので、氣がつかぬのだといふ。どうしても鯨には大きい處がある。

五 捕鯨記その二

一時四十五分となつた。多くの中で、一番運の悪いのが、舳頭の前面十二三間少し左寄にぼつかり浮いて、極めて暢氣に潮を噴き上げた。

轟然一發。白煙。白波。海底に第二の爆發。これは鯨の體に突き入つた銛頭の破裂した響ださうな。

船長は大聲に「オール、ライト」。船員は齊しく叫んだ。「オール、ライト」「オール、ライト」。砲手は此の一發の命中に於て、多大の名譽を荷なへるにも關らず、顔面に些の表情を示さず、例の如く悠然として砲の傍に立つて居る。

余はいつの間にか唯一人、船橋の上に残された。水夫長も水夫も皆下に降りて了つたのである。「萬歳。萬歳。」と余は絶叫したが、誰も應じない。下ではそれ所ではないのであつた。

ウインチの回轉は風車の如くである。銛綱は水

の迸る如くに繰り出されて居る。摩擦の爲に熱する車輪へ、水を掛ける。機械の要所々々へ油をさす。船庫に飛び降りて繰り出された綱の捌をつける。檣から吊り下げた滑車から、鋼鐵索を下す準備をする。更に又第三の銛を仕込むべく迅速に支度をする。これが皆同時である。

が、さて肝腎の鯨はと見ると、何處にも見えぬ。しかし銛綱はぐんぐん海中に沈んでいく。何だか甚だ心細くなつた。そこへ汗だらけになつた機關長が登つて来て、「御覽なさい、いまは後へ」を掛けて居る

のです。それに、「徐行」位の速力で、船は出て居ます。」と教へてくれた。百二十噸の汽船は今や一頭の鯨を綱引に備つて、石炭を焚かずに海洋を走つて居るのである。

二時ごろ遙に遠く手負鯨は浮き上つて、それでも高く海水を噴き上げた。船を引く力は少しも鈍らぬ。「今、銆綱は二百七十尋ばかり出て居ます。まだ九十尋は餘つて居ます。なに、其の内にはもう弱りますよ。」と機關長は平氣。「すると、もうこれで一段落ですか。」と余は問うた。「や、どうして〜。これから

が大活劇です。」と云ひ捨て、馳せ降つた。

此の時、事新しく驚かれたのは、海原の廣大なることである。巨鯨は紙鳶の如く小さく、銆綱は風糸の如く細く見えるのである。

二時十分、今まで鯨に引かれて居たニコライ丸は、愈反對に鯨を引き寄せ、段となつた。引き始められてからは、鯨の浮き沈みが急激になつて、二分時、三分時毎に海水を吐くのである。それが近寄るに従つて益々繁く、後には、潮と共に傷口から血を噴くのをへよく見える。銆の打ち込まれて居る處は、人間な

らば腰といふ邊である。背部の疣うぶの左方である。其所から五六尺も高く血を噴き上げながら、未だ死に切らぬ鯨の喘ぎ。物がかり偉大であると、悲惨といふ念は起り悪い。これをも壯觀の内に數へたくなる。

とゞめの銚を撃ち込む時は來た。二時四十五分に又彼の砲で撃つた。が、當らなかつた。三時十分の頃には、血だらけの海波がそろ／＼荒立つて來た。風が出たのである。三時二十分、再びとゞめの銚を撃つた。今度は當つたけれども、鯨はまだ死なぬ。

冒冒

そこで、愈捕鯨事業中の大冒險たる端艇突撃の令は下された。

左舷に吊つてある二間未滿の小端艇は忽ちにして下された。この勇敢なる乗組はと見ると、二水夫と船長とである。船長は手に槍の如く見える四間餘の突銚を持つて、端艇の艦に突つ立つて居るのである。西西生浦から蔚山蔚山の急に走るべく、船頭に槍を杖づいて立ち上つた鬼將軍の雄姿、それを洋式で見せて居るのである。余は帽を無闇に振つて、萬歳萬歳を絶叫した。

韓國慶尙南道韓國慶尙南道にあり。同上。

勇敢なる端艇は見るく、海中の噴火山に突進した。血煙は日光に反射して火山の焰に異ならぬのである。忽ちにして端艇は鎔岩流とも見るべき巨鯨の胴中に乗り揚げて、船體は一本立となり、人は皆逆様になつた。見る者は、皆冷汗をかいたのである。「あつ」「あつ」と云ふ聲が其所にも此所にも響き立つた。沈著なる砲手までが、此の時ばかりは救命浮標に手を掛けようとして居る。實に此の端艇突撃位、危険な事業はないのであつて、若し鯨の尾羽か手平かに觸れようものなら、それが最後、船體は粉碎されて了

ふのである。乗組は無論跳ね飛ばされて、助つた處で一生の不具者。

唯見る、艦の船長、力と頼む一本の突銛を扱いて、鯨の心臓部目懸けて突つ込んだ。すると、同時に鯨の體は海中に沈み入つて、絶大なる血の渦卷。端艇は山頂から谷底へ落下したやうに吸ひ込まれた。

二水夫は必死となつて櫂を動かしたが、船長は未だ突銛を放さぬ。筏師が竿を泥川に突つ立てたやうな形で、一生懸命に力を入れて居る間に、急にそれを引き抜くや否や、それつとばかり五六間後退を命

闘鬪

じた。

引くか引かぬ間に、鯨は礁脈の如く又浮き上つた。それと見るや、奮然、端艇を再び乗り揚げて突く。沈む、退く、浮く、突く。四回ばかり繰り返された間に、六尺餘の銚の穂先柄の部は三間位は弓の様に曲つて了つたのである。

豫て用意の鐵槌で、退いては打ち直し、打ち返しては又突く。此の間の惡戦、苦鬪、實際の戦争にもこれ程の事は稀であらう。其の間に、船長は「えつ、面倒なり。」と思つたか、曲つた穂先を舷側に打ち附けて、反を

返し、今しも浮き上つたる鯨の手平の上を深く突き刺したので、さしもの大動物も全く絶命。兩方の手平を高く立て、雪の如き眞白い腹を出して、碧海に一文字。「萬歳」は始めて船員の口に唱へられた。時に午後三時四十一分。發砲してから此の最後まで、實に一時間と五十四分を費したのである。

それから其の鯨をウインチで引き寄せて、右舷側に鐵鎖で結び附けた。大方ニコライ丸の八九分まであつた。身長を測つて見ると、六十一尺、胴の周圍の最廣部が二十四尺。長鬚鯨の雄であるといふこ

とだ。(捕鯨船に據る)



鯨

海上胤平

潮けぶる灘の荒波さく、みて

鯨行く見ゆ、み熊野の海。

六 音訓

漢字ノ我が邦ニ入リシ時代ハ詳ナラズ。サレド
應神天皇ノ頃ニハ百濟ノ博士來リテ皇子ニ書ヲ授
クルコト、ナリ、學習ノ道モ漸ク開ケシガ、イクバク

モナクシテ支那トノ交通次第ニ盛ニナリ、支那南方
ノ音ヲ傳ヘタリ。コレヲ吳音トイフ。

行狀 經文 京都 平和 繪馬

推古天皇以後遣唐使留學生ノ彼ノ土ニ赴クヤ、ミ
ナソノ都、長安ノ音ヲ傳ヘタリ。コレヲ漢音トイフ。
漢音ハ支那北方ノ音ナリ。

行李 經書 京師 混和 繪畫

當時、我が邦ニテハ頻リニ唐ノ文化ヲ輸入スル時
ナリシカバ、朝廷ニテハ盛ニ漢音ヲ獎勵セシガ、吳音
ノ傳來舊クシテ、久シク邦人ノ口耳ニ慣レタレバ、全

ク廢絶スルニ至ラズ。ソノ結果、儒書ハ大概漢音ヲ以テ讀ムコト、ナリタレドモ、佛書ハナホ多ク吳音ヲ用ヒ、後世ニ至リテモ、普通語ニハ、吳音ヲ用フルモノ頗ル多シ。

カク吳音トイヒ、漢音トイフモ、悉ク支那原音ノマニハ非ズンテ變化セシモノ往々アリ。コハソノ傳習ノ際ニ於テ、自然ニ變化セシモノナルベケレドモ、マタ多少邦音ニ適スルヤウニ改メタルモアルベシ。

吳音漢音既ニ行ハレタル後ニ於テ、宋ヨリ以來、彼

我僧侶ナドノ來往セシモノ更ニ彼ノ邦ノ音ヲ傳ヘタルアリ。是ヲ唐音トイフ。コノ唐ハ唐代ノ意ニアラズシテ、タゞ唐土トイフ意ナリ。但シ唐音ハアル少數ノ文字ニ止レリ。

行燈 看經 南京 和尚 亭 鈴

近時、清國トノ交通頻繁ナルニ從ヒ、今日ノ北京音ヲ傳ヘタルモノアリ。是ヲ支那音トイフ。コノ支那音モマタ地名等ニ用フルノミニテ、多クハ行ハレズ。

北京 廣東 上海 哈爾濱

漢字ニハ、音ノ外ニ訓アリ。訓トハ漢字ヲ國語ニ譯シテ讀ミタルモノナリ。故ニ又訓讀トモイフ。コノ訓ヲ附セシコトハ、始メテ漢字ヲ讀ミ、ソノ字義ヲ譯セシヨリ以來、數十人ノ手ヲ借り、數十百年ヲ經テ、漸次ニ定マリシモノニテ、一人一代ニ成リシモノニ非ザレバ、ソノ人、ソノ時ヲ指定スルコト能ハザルナリ。

訓ニハ正訓アリ、意訓アリ。正訓トハソノ字ノ本義ノマヽニ國訓ヲ附シタルモノニテ、之ヲ分カテテ二類トス。第一ヲ一字ノ正訓トシ、第二ヲ二字ノ正

訓トス。

日^ヒ 月^{ツキ} 山^{ヤマ} 川^{カハ} 草^{クサ} 木^キ 鳥^{トリ} 獸^{ケモノ}

ノ如キハ第一類ニ屬スルモノニテ、コレ字訓ノ正則ナルモノナリ。

從弟^{イトコ} 伯父^{オヤジ} 叔母^{オバ} 海苔^{ノリ} 所以^{ソレユヘ} 加之^{ソノカミチラヌ}

ノ如キハ第二類ニ屬スルモノナリ。近來漢字ニ西洋語ノ訓ヲ附スルモノアリ。

隧道^{トンネル} 燐寸^{リンセン} 唧筒^{セキヤク} 麵包^{パン}

ノ如キ是ナリ。コレ亦正訓ノ第二類ニ屬スルモノナリ。

戊戌戌戌 巳巳巳

意訓トハソノ字ノ本義ニアラザレドモ、意ヲ以テ國訓ヲ附シタルモノニテ、之ヲ分カチテ二類トス。第一ヲ一字ノ意訓トシ、第二ヲ二字ノ意訓トス。

子^ネ 丑^ウ 寅^ト 卯^ウ 辰^タ 巳^ミ 午^ウ 未^ヒ 申^{サル} 酉^{トリ}
戌^イ 亥^キ

ノ如キハ、第一類ニ屬スルモノナリ。十二支ハモト動物ノ名ニ非ザレドモ、後ニ動物ニ配當セシニヨリテ、「ネ」「ウシ」「トラ」「ウ」ノ如キ動物ノ訓ヲ附スルコト、ナレリ。

草臥^{クダビレ} 七夕^{タナバタ} 團扇^{ウチハ} 流石^{カスガ}ニ 五月蠅^{ヒメハ}シ

逕庭

ノ如キハ第二類ニ屬スルモノナリ。コレ「タナバタ」(柵機)トイヘル國語ト七夕トイヘル漢語トハ、全ク同ジキモノニ非ズ、「ウチハ」(打羽)トイヘル國語ト團扇トイヘル漢語トハ異ナルモノナレドモ、大概相似タルヨリ、意ヲ以テ之ヲ當テタルモノニテ、ソノ間、多少ノ逕庭^{テイテイ}ナキコト能ハザルモノナリ。

音ト訓トノ別アルコト、大畧此ノ如クナレバ、漢語ノ熟字ハ音讀スル時ハ二字共ニ音讀シ、訓讀スルトキハ二字共ニ訓讀スベシ。タゞ國語ト漢語ト連合シテ熟字トナルトキハ、音訓交ヘ讀ムコトアリ、敷地^{シキチ}

奥行ノ類是ナリ。又正則ニ非ズシテ音訓交へ讀ム
 コトアリ。音ト訓トヲ合ハセタルヲ重箱讀又ハ合
 羽讀ト云フ。團子出立ノ類是ナリ。訓ト音トヲ合ハ
 セタルヲ湯桶讀トイフ。小僧身分ノ類是ナリ。コレ
 正シキコトニハ非ザレドモ、習慣アルモノハ、亦從ハ
 ザルベカラズ。(漢字要覽)

七 讀書

坪内逍遙

常に良き著述に親しむ者は、只獨り居れども寂し
 きことを覺えず、師を求めざれども日に月に學ぶ所

順境 一 思の通る行く

逆境

庇護 一 かげたまふ
くまもる、

*前一〇六一
前四三。

あり。失意にも慰み、不平・憂悶も之を忘る。「書は少
 年の滋味にして老年の娛樂なり。ツレイモト順境には心の飾
 ともなり、逆境には庇護と慰諭とを與ふ。家に在れ
 ば心を樂しましめ、外に出でたる時も邪魔とはなら
 ず。夜の伴旅の伴、僻地つれのまほの伴。」と羅馬の名士キケロの
 言ひたるも同じ心なり。されど、かくの如きは人の
 讀書より受くる最大の利益にはあらず。

諺に「百聞一見に如かず」といへるは、何事も其の身
 親しく經驗するに如かずといふ意味なれども、人の
 壽命いのちに限あれば、七十・八十まで生きたりとも、目に視

耳に聽くことは幾何もあるべからず。我が日本國内の山水風俗だけにて一生には觀察し盡くさるまじきを思ひ、天地の大なるを思ひ、時の窮なきを思つまじりかた見へば、人間一身の經驗の狭く、淺く、小く、且少かるべきは言ふにも及ばぬことなり。さればこそ今も昔も苟も事物の眞の理を知らんと欲し、事物の眞の相を看んと欲する人々は、一方には見聞を勵み、經驗を努むると共に、他方には廣く内外古今の名著を得てこれに親しまんことを願ふなれ。謂はゆる名著は人間世界開けてこのかた凡そ三千年間に出てたる大

賢・高德・碩學・大才の經驗・觀察・思索・想像を、そのまゝに又はランビキ大學者にかけて傳へたるものなり。或は顯微鏡・望遠鏡に譬ふるも可なり。もとは人工に成りたるものなれども、今は人をして肉眼の看得ざる微なるものをも、遠く且大なるものをも看取せしむ。後れて生まれたる者にして良書の助を借ることなく、只其の貧弱なる腦力のみを恃まば、自然界の事も人間界の事も僅に一斑を窺ふに過ぎざるべく、其の一斑さへも正しく明らかなには看得ざるべきが常なり。要するに、書は知識の寶庫にして、兼ねて智を研

(一)
一三〇四
一三七四

く砥石なり。しかしながら讀書の用は尙これに盡きたるにあらず。

伊太利の詩人ペトラルカはいはく、「予に良友あり。彼等皆名士大家にして、いづれも偉業を成したる者なり。予若し其の助を藉らんとすれば、彼等は喜んで我が請を容る。」と。是、良書が常に其の讀者を啓發し、誨導し、鼓舞し、獎勵する力あるをいへるなり。北米の名士チャンニングも曰く、「吾人が傑出せる心と相語ることを得るは、おもに書籍の媒介に因る。而して、かゝる價知らぬ交際の手段は、衆人の自在に用

(二)
一七八〇
一八四二

*
一六〇八
一六七四

ひ得る所なり。最良の書に在りては、俊傑、吾人に對ひて語り、其の最も貴き思想を吾人に與へ、且其の心靈を吾人の爲に吐露す」と。英國の詩人ミルトンもまた曰く、「良書は保存踏襲して後世に傳へられたる俊傑が貴重なる生血なり。」と。

人は良書に親しみて、まづ我が卑小なるを知るなり。次には、或は識見の大なるに驚き、或は品性の高きに感じ、嗚呼、同じく人といふ、高く、清く、美しく、偉なることかくの如きものもあるか」と歎ずるなり。若しかりそめにも其の偉なるもの、美しきもの、清きもの

俊傑 千人に一人の俊傑
高きもの、清きもの、美しきもの、偉なるもの

の、高きものに私淑し、これに倣はんとする志を生じ、日に月に力め行ふに至りなば、書ヒツカの用極れるにちかしといふべし。(中學修身訓)

八 杜鵑を聞く

瀧澤馬琴

天保十一年

庚子四月十五日の朝、杜鵑のはじめて鳴くを聞きぬ。五月多立夏後十日なり。去年は立夏の日より鳴きぬ。去年より十日後れたるは季節の遅速あればなるべし。吾この鳥の聲を聞く毎に、故兒琴嶺コノの事を思ひ出でて、懐々たり物によりて懐舊の情あること、人

天保六年五月七日歿

皆然り。景によりて情起り、情を以て景を思ふ。脆きは人の心なるかな。(著作堂雜記)

月前郭公

八田知紀

ほととぎす、この有明の月にとて、

日頃をしみし初音なるらん。

九 「世界之無線電信」の著者に贈る

島村速雄

「世界之無線電信」御稿本御送附に預り候處、時

八田知紀 通稱喜左門
鹿兒島藩士、景樹の門
明治六年歿

節柄にもあり、且は御出版御急ぎの事と察し、緩
緩拜讀の餘暇を得ざるは遺憾の至に候へども、
其處此處と拾ひ讀み致し候ばかりにてても尠か
らざる興味を覚え申し候。

電信の戦争に至大なる影響を及し候事は疾
く人の知る所にこれあり、今回の戦役に於ても、
大山元帥が南滿洲一面に蜘蛛の網の如く張ら
れたる電信電話線をとほして、日夕諸方面より
の情報を得られ、數十萬の大軍を指揮して古今
未曾有の大勝利を收め居られ候事は、誰も想像

鎖鎖

致し得る事と存じ候へども、東郷大將が海上に
於て目に睹ること能はざる電波を驅つて數十
隻の艦^{軍艦}を手足の如くに指揮せられ居り候事
は、一寸世人の想像の及び難き事かと存じ候。
昨年數箇月の間、旅順口封鎖の節などは、大將は
大抵常に同地より數十里の海面に在られたる
事に候が、旅順港外に配置せられたる我が哨艦
より無線電信により日夕敵の情報を受けられ
候へば、端船の港口出入に至るまで殆ど手に取
る如くに承知せられ候のみならず、攻圍軍日々

の通報の如きも、大連灣碇泊の中繼船を経て、やはり電波の力により斷えず承知せられ、大將もこれに應じ、また電波を介してそれ〴〵我が艦隊を指圖せられたりと申す次第にこれあり候。且此の無線電信は陸上電信線による通信の如くに獨り發信者と受信者との間にのみ通じ候にてはこれなく、電信機械を備へ居り候各艦へ同時に知れ渡り候事なれば、各艦とも新聞號外の類を待たず時々刻々新しく且活きたる情報を即座に承知致し得る次第に候へば、長日月の

効效

間、困難なる封鎖勤務に於て全軍に些少の倦怠をも生ぜしめずして相濟みしは、主として無線電信の賜と相感じ申し候。他年若し當時各艦より發せる無線電信の一日分のみにてても一讀致し候は、趣味津々たるを覺え申すべしと存じ候。而して我が海軍の無線電信をして右の如くに有效ならしめたることは、貴下多年御盡力の功多きに居る事と只管敬服致し居り候。惟ふに本邦に於ても無線電信の事を研究せる人士尠からざるべし。さりながら、時局の必要

に迫られ、専心一意、學理と實驗とを併せて、貴下
ほど十分に此の事を研究せる士は恐らくはま
た他にこれあるまじく、而して今其の人により
て斯の學の好著述世に出て候事は、誠に科學界
の幸福にして、定めて非常なる歡迎を受けられ
候はんと今より期待致し居り候。よろこぶべからず

殊に貴下が序文に於て、此の最も新しき科學
の發明に係る巧緻なる機械を、最も古くより傳
來せる大和魂を以て今はの際まで泰然として
使用せし軍艦吉野無線電信係下士卒の忠烈な

忠烈なる

吉野艦長佐伯閣

る事蹟を紹介せられたる事は、最も會心の點に
これあり、ひとり小生が當時の事を回想して亡
友佐伯大佐も定めて地下に満足致し候はんと
察し候のみならず、此の事蹟たるや、教育の注意
によりては、科學の進歩が決して我が大和魂に
何等の障礙をも與ふるものにあらざること
を證明致し候ものにて、識者の舉つて感謝すべき
事と存じ候。抑、小生共は日夜無線電信の恩澤
に浴し居りながら、其の原理の如きは今に了解
に苦しみ、却て他の感想に馳せ候事も尠からず。

茶しむる心

「開戦以來我が四千餘萬の同胞が各其の分に應
 じて義勇公に奉じをる至誠天に通じ、一種靈妙
 にして物質界の電波に對比すべき正氣の波動
 を起し、出征軍隊と後援國民との間に互に感應
 して、かく都合よく戦局を進めをるにあらずや。
 而して其の氣の凝るや、恰も電氣の結んで雷電
 となれるが如く、或は奮激死に赴く決死隊とな
 り、或は從容死に就く吉野電信係の如きものと
 なり、壯烈鬼神を泣かしむる幾多忠勇の士を現
 しをるにあらずや。」などの感想を起し候事にこ

れあり候。

餘事はさておき、貴著述に對し、序文御求に預
 り候處、これはとても小生のがらになき大役に
 御座候間、平に御斷り申し上げ候。尤も此の俗
 文中に記載いたし候事柄にして、何等かの御役
 に相立ち候ものもこれあり候はゞ、御隨意に御
 使用下さるべく候。先は他に先だつて、貴著拜
 讀の光榮を得候事の御禮、且は昨年來度々の御
 懇書、殊に珍しき外國新聞紙の御惠贈に對し、何
 等の御挨拶をも申し上げざりし闕禮の御詫を

兼ね、右申し述べ候。時下不順の候、益御自愛、斯の學の御研究を重ねられ、遠からず貴著標題に二字を加へ、「世界無比之無線電信」を我が海軍に貢獻せられんこと、切望の至に御座候。敬具。

明治三十八年五月二十五日夜、時々刻々、波羅的艦隊見ゆ。との無線電信を待ちつゝ、軍艦、磐手電燈の下に於て、

島村速雄

木村駿吉先生

(世界之無線電信)

一〇 日本海の家戰その一 新保 磐次

日露開戰のその日、我が海軍が仁川、旅順に露艦を撃破せしより、露國太平洋艦隊の威力漸く衰へ、剩さへ旅順口は閉塞せられ、浦潮港との聯絡は遮斷せられ、さしも精銳に誇りし大艦隊も手を束ねて港内に蟄伏し、只増援艦隊の來るを待つのみなり。

露國も絶東艦隊の衰滅を坐視するに忍びずやありけん、更に波羅的艦隊の精銳を擇びて、太平洋第二艦隊、第三艦隊を組織し、遠く絶東に派遣して、日本艦隊に復讐し、再び東洋に雄視せんことを圖れり。然

れども、各國が局外中立を布告せる今日、港灣を假ら
 ず、炭水の供給を受けずして、萬里の波濤を航せんこ
 と思ひも寄らぬわざなれば、世間の人は例の大言よ
 と聞き流すが多かりき。されど、人の思ひ寄らぬ事
 を思ひ寄りて、遂には成功する事も亦露國の得意な
 れば、油斷はならず、石炭船、浮船渠等、種々の研究準備
 を積みて、八月十日、海軍軍令部長海軍中將ロジエス
 トウエンスキーは艦隊司令長官に補せられ、九月九
 日、皇帝親ら艦隊を檢閲して、其の行を壯にし、同じき
 十三日、艦隊はクロンスタット軍港を拔錨せり。

峻高—深々思ふこと

銜—し君を奉じて行ふこと

相銜—互に力を合せて

威容—堂々—威光
おろからしむる事すかた

斯くて、ロジエス トウエンスキーの艦隊は遠航の
 警戒怠なく、而も露國一流の無頓著を以て、或は漁船
 を砲撃し、或は商船を拿捕抑留し、或は中立國の港灣
 に久しく碇泊し、到る處に事を起して、世界の物議を
 物とも思はず、遂に翌年五月五日といふに、友邦佛蘭
 西の領海、安南沖にて、ネボカドフ少將の引率後續せ
 る太平洋第三艦隊と合して進發せり。其の戦闘艦
 八隻、巡洋艦九隻、海防艦驅逐艦、假裝巡洋艦より特務
 船、病院船に至るまで、すべて三十八隻、舳艫相銜み、威
 容堂々として東洋を壓せり。「流石に規模廣大にし

て、常識の及ばざる露國かな。」とて、今まで波羅的艦隊の東航を虚喝ウソなりと思ひし人々も、皆聲を齊しくして驚嘆おどろきせり。

此の間に、我が軍は旅順口を陥落して港内の露艦を全滅に歸せしめたれど、浦潮に残れる一二艦は其の快速力を利用して、屢日本海に出没し、我が商船運送船を脅迫し、撃沈して、海路に大なる恐慌おそを與へたり。されば、波羅的艦隊が、數隻なりとも浦潮に入るは容易ならざる事なり。今や、敵の艦隊は最後の艦隊なれば、たとひ我が海軍に多大の損害を受くとも、

一舉に敵艦を殲滅せんめつせざるべからずとて、我が聯合艦隊司令長官東郷大將は、幕僚艦長を集めて、深大周密しんたいしゆみなる軍議を凝らしたり。

大洋の戦は敵を討ち洩らす恐あり。また、敵が海峡に入るを待たんとすれば、對馬海峡・津輕海峡・宗谷海峡の三道ありて、敵はいづれの道を取るならん。是、第一の問題なり。東郷大將は非常なる苦心を以て、敵が必ず對馬海峡を通過すべきを偵知てんちしたれど、謀には裏の裏といふことあり、其の時に至りて、いかいかに用意の齟齬そごせんも知り難しとて、まづ對馬海峡に

幕僚——艦軍の座下あり
こ秘密の相討は預るもの
なり 考案なり
周密——こまかくしてすまじ
なり

全力を集中したれど、津輕・宗谷の二方面に向かつても亦臨機應變の準備を整へたり。

ロジエハスミンストウエンアワスキー將軍も對馬の防備嚴密なるべきを知らざるに非ずと雖も、石炭の缺乏并に其の他の事情よりして、外海迂回の策を取らず。一よしや艦隊の半數を失ふとも、二十隻の軍艦浦潮に入らば、日本の海上權を攪亂カウランして、遙に滿洲軍の供給を脅威するに足るべし。とは、是將軍の判斷なり。されば、彼我兩軍共に多大の損害を賭して、終極の運命を此の一戦に決せんとす。誠に古今海戦の觀物なり。

伯仲...物の優劣
はたかかるといふこと

單に敵身方の主力を數字的に比較すれば、敵は戰鬪艦八隻にして、身方は僅に四隻なり。然れども我が装甲巡洋艦八隻はいづれも新式にして、快速力を有し、進退一致の便あり、其の威力亦戰鬪艦に伯仲す。況や、我が將士には日本固有の武士道あり、百戰鍊磨の技術あり、形以上の力は、一以て十に當るに足れり。將校下士卒皆腕の鳴るを覺えず、露艦早く來れよかし。とこそ待ち受けたれ。

一一 日本海海戦その二 新保 馨次

さる程に、五月二十七日の曉天に、南方の哨艦たる假裝巡洋艦信濃丸の無線電信は敵艦隊見ゆ。敵は東水道に向かふものゝ如し」と報ぜり。全軍これを聞いて、踴躍し、各豫定の持場を固めたり。午前七時哨艦和泉も敵を發見して、其の勢力陣形針路等を本隊の旗艦三笠に報じ、其の儘敵の艦隊と接觸を保ち、時々刻々の動靜を報じつゝ、北東さして進航せり。かゝる間に、片岡中將出羽中將東郷少將の引率せる諸艦隊も次第に現れ來り、屢敵の砲撃を受けながら能く接觸を失はずして、對馬の東なる沖の島附近ま

て敵を誘致せり。

此の日、海上、濛氣深くして、五海里以外は黑白も見え分かざりしかば、敵はこれを幸に、我が艦隊の目を暗まして浦潮の方に遁れんと思ひしに、我が諸艦の報告によりて、數十海里を隔てたる敵の進退動靜の一々我が旗艦に映ずること、鏡をかけて見るが如くなりき。沖の島に至るまでは、兵士皆戦闘配列に就きながら、随意休憩を許されたるが、準備終りて、上官の巡視せし時には、兵士等、砲彈等を枕にして、軒の聲雷の如くなりき。古今の大戦を前に控へて敵前に

ありながら、物とも思はぬ、この沈著なる膽勇を見て、司令官を始め深く嘆稱し、「軍にははや勝ちぬ。」と頼しく思ひけり。

かくて我が本隊は午後二時沖の島附近に敵を迎へ、遙に彼方を見渡せば、豫て諸艦の報ぜし如く、敵は二列縦陣にして、主力の四戦艦は右翼列の先頭になり、司令長官の旗艦スワロフ真先に進み、又オスラビヤ以下の四戦艦は左翼の先頭たり、海防艦巡洋艦特務艦船等次第に濛氣の中より現れ出で、其の長さ數海里に亘れる有様は、實に世界の壯觀なりき。

一七五八
一八〇五
一八〇五年
八月二十一日

午後二時に近く、戦機已に熟しぬ。旗艦三笠の檣頭に、大戦闘旗の颯と翻るや、戦闘の號音勇ましく、旗艦は全艦隊に對して、「皇國の興廢此の一戦に在り。」各員、一層奮勵努力せよ。と信號旗を掲揚せり。この信號はネルソンがトラファルガルの海戦に、英國は諸君の努力を要求す。といひける信號と同じく、忽ち世界に傳誦せられたり。

こゝに於て我が主力隊は東郷大將直率の主戦艦隊を先鋒とし、上村中將の装甲巡洋艦隊これに續きて、吉例の單縦陣を布き、正にこれ大鵬の雲に翰つが

一 日本海海戦その二

六九

大鵬
想後上
丸なる鳥

大鵬の云々北軍のあり其の名を

艦の云々

其の後十里を知らざり

化して鳥と名づく

大鵬の北軍其の後十里を知らざり也 怒りて飛ぶ其初昇重天の雲の雲

鯤... 鯨... 鯨... 鯨...
鯨... 鯨... 鯨... 鯨...
鯨... 鯨... 鯨... 鯨...

四顧... 四顧... 四顧...
四顧... 四顧... 四顧...
四顧... 四顧... 四顧...

如く、巨鯨の浪を破るが如く、轟地に敵前に出て、出羽瓜生東郷(少將)の諸戦隊は遶りて敵の後尾を衝かんとす。

敵はかくと見て直に發砲を始めたれど、我が艦隊は靜まり返つて應砲せず。射距離六千米突に入るや、斜に敵の前頭を横ぎりて敵と丁字を成せる我が主力隊は、茲に一齊に敵の兩先頭艦に砲火を集中したれば、敵の諸艦も劣らじと應戦し、砲聲天地を碎くが如く、海水湯の如く沸き返れり。此の日、西風烈しくして砲烟海面に漲り、濛氣と相合して四顧冥々たり。

り。物すぎきこと言ふばかりなし。されども我が陣形の優越と技術の鍛鍊とは殆ど百發百中にして、敵の左翼先頭艦ヤマオスラビヤまづ大火災を起して戦列を退きぬ。續いて、旗艦スワロフ、二番艦アレキサンドル三世も火災を起して列を離れ、後續艦亦續々と火を失せり。東郷大將は、後日に至りて、勝敗已に此の間に決せり。」と報告せり。

哨艦和泉は初より敵艦隊と觸接を保ちて來りしが、砲戦始ると見るや、急に艦首を回らして、敵の砲火の集中するを物ともせず、獨力應戦して、遂に本隊に

天正十二年
四月
二二〇八
二二七〇

合せり。和泉が此の武者ぶりは昔長湫の戦に、本多忠勝が手兵三百を以て豊太閤の數萬の軍と並び行き、遂に家康の軍に合したるに似たりとて、皆人嘆稱したりけり。

かくて敵は北上の道を遮られ、只南東に、南東にと壓迫せられしが、かくては目的を達すべき道なしとや思ひけん、俄に北方に回頭し、死物狂の勢を以て我が後尾に廻り出でんとしければ、我が主戦艦隊も急に十六點回頭をなし、北西に向かつて敵の前頭を押し、装甲巡洋艦隊は分かれて敵の側面に出で、敵を中

にして殆ど乙字を畫き、益、猛射して再び敵を南方に壓したり。

勢かくの如くなれば、敵は北方に血路を開かんと遂に叶はじとや思ひけん、次第に南方に遁るべく見えければ、我が主戦艦隊、装甲巡洋艦隊、諸戦隊、此處彼處に分かれて、「餘さじ、洩らさじ」と掩撃せり。されば、前に戦列を離れたるオスラビヤスワロフアレキサンドル三世を始め、戦艦ボロジノ、特務艦ウラル等破壊沈没する者少からず。此の間、鈴木廣瀬の驅逐隊が白晝、壯烈なる水雷攻撃を決行せしは特に記す

べき所なり。

かゝる間に夕陽已に黃海に没し、豫て定められたる驅逐隊、水雷艇隊、東・南・北の三面より漸次に敵に迫りければ、我が主戦隊は戦場を新手に譲り、全艦隊も一時引き揚げて、明朝、鬱陵島に集合することゝなり、此の日の軍は果てにけり。

豫て夜戦は水雷攻撃と定めしかども、朝來、烈風激浪を揚げ、夜に入りて波浪未だ收らず、水雷艇の不利甚だしかりき。されど、此の千歳一遇の戦に一撃を試みずんば、生き残りても何かせんと、驅逐隊艇隊は、

日没前より來集し、先を争ひて敵に當れり。敵は探照砲火を以て極力防戦し、白虹紫電、雨の如く海中に飛ぶ。夜戦の壯觀譬ふるに物なし。我が襲撃隊争でかこれに擬議すべき、一時に突進して敵の周圍に蝟集肉薄し、其の攻撃の猛烈なること殆ど言語に絶しければ、敵艦應接に遑なく、而も其の距離餘りに近かりしたため、備砲俯角の度を過ぎて、照準を取ること能はざりき。此の夜戦に、敵の戦艦・装甲巡洋艦等の、或は沈没し、或は戦鬪力を失ひしもの亦多く、これによりて敵の陣形全く亂れたり。而して、我が水雷艇

照準は、照準の照準、目撃して、
多く、準備する、こと
照準は、照準の照準、目撃して、
多く、準備する、こと

も亦三隻を失ひぬ。

一二 日本海の家戦その三 新保磐次

明くれば二十八日、きのふの濛氣なごりなく霽れて沖の鷗カモメも見逃すまじく、追撃戦には上もなき好天氣なり。諸戦隊皆豫定の如く黎明より鬱陵島集合の途に在りしが、早くも敵影を發見して、主戦隊・装甲巡洋艦隊・東郷瓜生の諸戦隊は隱岐の西北なる竹島の南方にて、此の敵を包圍せり。これなんネボカドフ少將が、撃ち残されたる主力を率ゐて北方に奔る

一隊にて、戦艦・海防艦巡洋艦合はせて五隻なりしが、敗餘の殘艦已に抵抗の力なく、我が艦砲火を開くや、忽ちにして白旗を立て、降意を表しければ、特に將校以上の帶劍を許して其の降を受けたり。獨り巡洋艦イズムルードは其の快速力を利用して遂に北方に逃げ去りぬ。

かくて諸戦隊は八方に索敵運動をなして、或は殘艦を撃沈し、或は生存者を救助收容せしが、磐手・八雲の一隊は敵艦アドミラル、ウシヤークを發見追及して降伏を勸告せしかど、彼はこれに應ぜず、甘んじ

て撃沈せられたり。敵ながらもあつばれなる振舞
なり。きのふオスラビヤの沈没せし時、艦長へブル
が生存して收容せらるゝを屑しとせず艦橋に立ち
て自殺せしと相並びて一對の美談たり。

こゝに驅逐艦、漣陽炎は、鬱陵島附近にて敵驅逐艦
を發見し、極力追撃して、午後五時、砲火を開きしに、敵
は白旗を掲げて降を乞ひ、艦内に將官の在ることを
信號せり。事の様不審なれば、我が士官は日本刀を
帶し、兵は小銃を携へて臨檢せしに、豈料らんや、敵の
司令長官ロジエ、ストウエンスキー中將及び幕僚等

匿

こゝに匿ひそび居たり。中將は重傷を負ひたれば、敵の

懇請ねんこうを容れて只數人の將校のみを我が艦に收容し、

綱を以て降艦を引きて佐世保に入りぬ。きのふま

では大國の司令長官として海洋に横暴の限を盡く

し、が、今日は捕虜となりて敵國の士官しやくわんに引かれ行

く。あはれといふも愚なり。

かくの如くして、敵艦三十八隻の中、八隻の戦艦は、

其の六を撃沈し、其の二を捕獲し、其の他装甲巡洋艦

以下も亦或は撃沈し、或は捕獲し、或は抑留し、若しく

は武装を解除したり。その辛うじて逃れ得たる者

抑留

僅に二隻のみ。捕虜は司令長官以下無慮六千と注す。而して我が失ひし所は水雷艇三隻死傷六百餘人にして、其の他艦艇に多少の損害を受けたれども、今後の役務に支障あることなし。

今回の如き大捷・鏖戦は有史以來の海戦に未だ曾て聞かざる所なり。有名なるトラファルガルの大捷すら艦船の損害少からず、ネルソン大將は壯烈なる戦死をなせるに非ずや。敵と我とを比較するに、其の兵力大差あるに非ず、却て敵はネルソンが勝を得たる陣形を取り、我は佛西艦隊が敗を取りし位置

鏖戦ニみなこころをこめて
全力をつくして決戦する意氣
唐書に「勇猛決死」

を占めたり。しかも、能く此くの如き大捷を得たるは、豈戦勝の原因が物質にあらずして精神にあるの好例にあらずや。

捷書、宸聰ツツウに達す。五月三十日、聯合艦隊に勅語を賜ふ。其の中又、様の手に宣へることあり。

朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌ツツムブ

東郷大將奉答の語に亦曰へり。

此ノ海戦豫期以上ノ成果ヲ見ルニ至リタルハ、一ニ陛下御稜威ノ普及及ビ歴代神靈ノ加護ニ依ル

モノニシテ、固ヨリ人爲ノ能クスベキ所ニアラズ。平和克復の後、米國の富豪シツプ氏我が邦に來遊し、歸りて國人に語りて曰く、日本人は已に歴史上未曾有の大捷を忘れたるが如く、今や専心、戦後の經營に従事せり」と。ガーター勳章を捧げて渡來し給ひし英國コンノート親王の隨員リーズデール卿が歸りて夫人に示せる紀行にも亦この事を稱揚して、日本人の此の謙遜自重なる精神は名譽ある大捷の原因にして、彼らはこれを以て世界の模範的國民たる者なり」といへり。(女子國語讀本)

一三 せめては草

森 鷗 外

鳴^な緑^りの川越えてより、滿洲の野の高黍^{こほ}や、
再び實のりて刈られけん、待てば久しき歲月よ。

いざや迎へん、皇軍を。

白楊疎^{うらや}に、陰もなき廣野の夏やいかなりし。

狡兔^{こつと}をまねぶ土窟^{つちくわ}の冬の夜や將如何なりし。

いざや迎へん、皇軍を。

愛兒討たせし將軍より、^{親友}同胞魂あへる
友喪ひしつはものよ、よくぞまさきく還りぬる。

いざや迎へん、皇軍を。

陸に奉天おとしいれ、海に艦皆沈めてし
捷にふさはぬ獲をば忘れて今日を祝ひなん。

いざや迎へん、皇軍を。

日頃御國のアルサスと惜しみし領土樺太も
此の戦のおもひでに、せめては半ば還されぬ。

いざや迎へん、皇軍を。

人の嫁の衣織りし恨十年の遼東も、
此の戦の思出に、せめては我が手に落ちにけり。

いざや迎へん、皇軍を。

畝畧

望の夜過ぎて月は虧け、畝器も満つれば覆る。

満ち足らはざる平和ぞなかく、裔の幸ならん。

いざや迎へん、皇軍を。

白き薔薇にけおされし口なし色の笹の菊、
今は扶の杖しげく耀く地の中黄色

いざや迎へん、皇軍を。(うた日記)

一四 雑草

幸田露伴

雑草といふものこそ恐しき者なれ。之を蹂み躪
り、之を刈り薙ぎ、之を抜き棄て、之を焼き拂ひても、終

に盡き滅びたる例を聞かず。必ず年々の春夏を我が世顔に生ひ茂りて、あはよくば、人の思を寄する園の花をも逐ひ退け、民の命と頼む稻麥をも虐げて己のみ心のまゝに蔓り榮えんとす。されば、園守・田夫少しく之を除き去ることを怠れば、忽ちその咎を得て、花は色なく、穀は登らざるに至ること、彼の「道高きこと一尺、魔の高きこと一丈」といへる諺も思ひ合はざるゝばかりなり。世若し雜草といふものなかりせば、善く勤むる者も惰る者も一度種子を播き、苗を植ゑたる以上は、皆同じ報を得べきに、これありて、勤

むる者は佳報を得、惰るものは惡果を得るなり。雜草は人間の惰怠を警むる造化の鞭にやあらんと恐し。(潮待ち草)

一五 梅雨

徳富 蘆花

雨降りて止み、止みて復降る。鴉カラス聲と蛙聲とこも

ごも雨晴を争ふ。

晴れと雨降り雨の絶間に出でて、麥藁まじりの深泥を踏みつゝ、村を過ぐれば、綠暗き家には人ありて、梅子を落し、畑には甘藷を植うる女あり。嫩黄田々、秧猶疎にして、

水多く、田より田に落つる水は音さへ濁りてごぼごぼと鳴る。梅雨の頃はまさに水の聲なり。

川には膏アキラの如き碧潮満々として、黄なる麥藁一束浮き沈みつゝ漂へり。川邊の蘆稀に穂を出せり。

その蘆を折り敷きて、鰻ウナギ・鯰サカナを釣る子供あり。

氣重うしてこまやかなり。村より出づる煙の濕りて立ちものぼらず、靄となりて這へるを見よ。山の藍深く、綠濃うして、滴水を落さば、色融けて流れんとするさまを見よ。

山ヤマに梟フクロウの聲あり。雨はらくとまた降り出でぬ。

(自然と人生)

一六 我が幼時

新井白石

わが六歳の夏の頃、上松といひし人の、少し文字なごありしが、七言絶句の詩一首教へて、其の意を解き聞かせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしを、人にも講じ聞かせたりき。「此の兒、文才あり。いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。」など、彼の人もいひしかど、頑なる昔人たちの云ひしは、昔より言ひ傳へし事あり。『利根氣根黄金の三こんなくして』

利根氣根黄金の三こんなくして

新井與次右衛門正濟
上總國久留利
利城主土屋
民部少輔利直

は、學匠にはなりがたし。』といふなり。此の兒利根こそ生まれつきたらめなほ幼くして、その氣根のほどもはかりがたく、家富めりとも見え。ねば黄金のことも得られず。『まどいひき。我が父も戸部の御いつくしみによりて、常に側を離れ參らせず。學に入れ、師に従はしめん事もかなふべからず。されど、幼きより、物書くことをば、戸部も人々に語り誇らせ給ひしことなれば、せめて物をば書き習はしめたくこそ侍れ。』とて、我が八歳の秋、戸部の、上總國に往き給ひしあとにて手習ふことを教へしめらる。



其の冬の十二月なかば、戸部歸り參り給ひしかば、常に傍に侍ふこと故の如く、明けの年の秋、また新國に往き給ひしあとに井て、課を立てられて、日のうちには行草の字三千、石夜に入りて一千字を限りて書き出すべし。』と命ぜられたり。冬に至りぬれば、日短くなりて、課はまだ満たざるに日暮れん

とすることたびくにて、西向きなる竹縁のある上に机を持ち出でて、書き終へぬることもありき。又夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へ難きに、我に附けられしものと密に謀りて、水二桶づつかの竹縁に汲み置かせて、いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎ捨て、まづ一桶の水をかぶりて衣打ち著て習ふに、はじめは冷なるに目覺むること、ちすれど、しばし程經ぬれば、身暖になりて、また睡くなりぬれば、水をかぶること前の如くす。二たび水をかぶりぬるほどには、大やうは課をも満てたりき。これ我が九歳の秋冬の

間の事なり。

かゝりし程に、この頃よりは、我が父の、人に贈り給ふ文をばかたの如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日のうちに淨寫して參らすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、冊になして戸部に見せ參らす。賞め給ふこと大方ならず。十三の時よりは、戸部の、人と贈答し給ふ程の文ども、大方は我に命ぜられき。

又、十一歳の時に、我が父の友の關といひし人の子

供は太刀打の技に勝れて、人に教ふることありしを、我にもこの技教へられん事を望みしに、「わぬし未だ幼し。これらの技學ばんこと尙早かり。」といふ。「さこそ侍るべけれど、太刀使ふ事少しも心得ざらんには、刀脇差、腰にせんこと誠に不用の事にや。」といひしかば、「のたまふ所誠に然なり。」とて、傳へて習はしめたり。かゝりし程に、其の年十六になりし者の、我と藝を試みんといひしかば、木刀をとりて、三たび合ひて三たびまで勝つことを得たりしにぞ、人々も亦興に入つて笑ひける。(折り焚く柴の記)

零し。

一七 舊師に特殊學校の模様をしらす
先生、御障もございませんか。私は無事に勉強致して居ります。「よく降る雨だ。もう霽れてもよさゝうなもの。」などと忘れては愚痴を零したくもありませんが、この雨がなかつた日には、全國の農家は田植が出来ないでせう。「傘賣る家に喜あれば、履うつ家に悲あり。」とはいつぞや先生から伺つた句ですが、それにしても、この霖雨には、細民の困難が思ひやられますので、つい

思ひ立つて、この間、貧民學校を見にまゐりました。まづ一番に驚いたのは、缺席の多いことです。これは雨のために収入の途が全く杜絶したためもあり、又、雨具の用意がないためもあるさうです。試に保護者の職業別を聞きますと、最も多いのが人力車夫、それに次いで、日傭人足、紙屑拾、屑買、空瓶買、下駄直らうすげかへ、縁日エニケ商人などでありました。これらの中には、相當な錢を儲けて來るものもあるが、何分宵越しの錢は遣はぬ、有れば有り次第、無ければ食はずに

得

寝て居るといふ風ださうで、貯蓄心の養成は別してこの社會に必要と思はれました。その割に、生徒の身體が清潔で、別段臭氣もないのは怪しいと思ひましたが、それも道理、學校で毎週一回、風呂を立て、生徒を入浴させ、その上、髪をすいて奇麗にしてやるとの事。學用品一切を支給された上に、この待遇は、實に有り難い事と存じます。追々には學校醫に毎週數回診断投薬をもさせる様にする計畫ださうでございます。「いづれ、文明の進歩につれて、貧富の懸隔するの

瑞西の人。
一七四六—
一八二七—

は已むを得ぬことでありませうが、どうぞかやうな施設を全国各地で十分に整へるやうに致したい。これが取りも直さず社會の安全辦である。」と熱心面に見れて校長は話されました。昔のペスタロッチ先生はやはりこんな人ではなかつたてせうか。先生もこちらへ御出の折は是非一度御覽なさいませ。私が御案内を申し上げませう。さやうなら。

一八 稻葉一徹

原文 湯浅常山

美濃の人。
二一七六—
二二四八—

唐の文章家
詩人。
一一四二—
一四八四—

稻葉伊豫守一徹既 稻葉伊豫守一徹、織田信長ニ織田氏ニ服從セシニ從ひたれども、信長、心解けガ、信長、意未ダ釋然タラザリキ。乃チ茗謙ヲ設ケ、之ヲ茶室ニ延キ、竊ニソノ臣三人ヲシテ伴接ニ託シテ、以テ之ヲ圖ラシム。一徹從容トシテ室ニ入リ、壁間ニ挂クル所ノ馬不前」といふ句なり。一徹

藍關
韓退之

美濃の人

詩ヲ朗誦シテ曰ク、雲、少し學問ありて讀みけるに、
 横^{ハナ}秦^シ嶺^リ家何在、雪擁^ユ藍、相伴その故を問ふ。一徹あ
 關^マ馬不前^マ。下。三人就らあら仔細を話しければ、信
 イテソノ義ヲ問フ。長壁越しにこれを聞き、つと
 一徹一々分解シ、并ニ走り出でて、一徹は荒勝負ば
 ソノ典ヲ説クコト甚かりする勇士と思ひしに、今
 ダ詳ナリ。信長壁ヲ聞く所、文學にも達せり。奇
 隔テ、傾聽セシガ、忽特の事、感ずるあまりに、實を
 然走り出デテ一徹ニ語るべし。今日のもてなし
 謂ツテ曰ク、我初メ汝は茶の湯にあらず、その方を

裏裏

ヲ一武勇男子ト謂ヘ 刺し殺さんとせしたくみな
 リ。今乃チ、ソノ文學 相伴の三人、皆懷劍を差
 アルコトカクノ如キ したり。今日より永く我に
 ナ知リテ、猜疑^{サイギ}ノ念頓^{ニハカ} 従ひて謀を致されよ、ゆめゆ
 ニ消シヌ。下。一徹頓^{ニハカ} め害心をやめたり。といはれ
 首シテ謝ス。 ^{敵の儀} ければ、三人の相伴、懷より小
 是ニ於テ、三人ニ命 脇差を取り出す。一徹平伏
 ジテ、各ヒ首ヲ懷ヨリ して、死罪を御免下され候こ
 取リテ以テ之ヲ示サ と忝く候。私も内々今日殺
 シム。一徹モ亦袖裏 さるべきにて候はんと察し

ヨリ一刀ヲ出シ、笑ツ 申し候へば、詮方なく是非一
テ三人ニ謂ツテ曰ク 人、相手を取り申すべしと存
「今日ノ事、僕モ亦徒死 じ、用意仕り候」とて懐劍を取
セザルヲ期セルノミ。」
ト。(近古史談ニ據ル) り出して信長に見せ申しけ
れば、信長愈その心懸を譽め
られけり。(常山紀談)

一九 笑話三則

禁酒

「酒貰うた。温めてあるから、一杯飲みやれ。」「いや、

おれはちと願ねががあつて、三年禁酒した。」「これは心も
とない。合點が行かぬ。」「はて、嚴しく飲まぬ處を見
ておきやれ。」といつて、歸る。次の夜、皆飲んで居る處
へ、「酒飲みに来た。」といつて来る。亭主も呆れて、「それ
見やれ。昨日の事をもう破るか。」「破りはせぬが、お
れも發明を致して、三年の禁酒を六年にして、夜ばかり
飲むつもりぢや。」「是も尤ぢやが、とてもものこと、十
二年にして、晝夜のみやれ。」

十徳

醫者の飯たき、旦那に向かひ、「お前様の羽織は他人

のとはちがひますなあ。」といふに、「これは羽織ではな
い、十徳といふ物ぢや。即ち、坐れば羽織のごとく、立
てば衣のごとく、ごとくとごとくとで、十徳ぢや。」と聞
いて、是はよい事を覺えた、と直に近所へ行き、「十徳の
譯を知つてゐるか。」「いや、知らぬ。どういふ譯
だ。」「されば、まづ坐れば羽織にいたり、立てば衣にに
たり。これはしたり。」

うそつき彌次郎

うそつき彌次郎上方より歸り、さて、京都は花の都
ほどあつて、誠に上品な所ぢや。まづ、大道をあるく

足曳

前裁屋などが、烏帽子直垂で、「足曳の山の芋」と呼び、紙
屑買は「ちはやぶるかみくづ買はう」といふ。雪駄直
は「知るも知らぬも逢坂のせきだなほし」と申してあ
るきます。といへば、傍にゐる人、はてな、そして、足袋屋
などはなんと呼びますな。といへば、彌次郎これには
おほきに困り、頭をかきながら、「お、それく。」「菅家
こんのたび、こんのたび。」

二〇 岩倉右府その一 井上 毅

月日の小車は旋りくゝて流るゝ水よりも早く、故*

*故右大臣岩倉具視公。實は堀川親子の明。治十六年七月二十五日薨。九。月二十五年。

右府公大臣の世を去りたまひしより、今ははや十年あまりぞ過ぎぬる。

「大詔のまにく、わが國を富士がねの安やくらきに置か
てやは」と思ひ入りたまへる公の一筋の誠心は、天地
の間に満ちわたりて、窮みなき後の世まで語り繼ぎ、
聞き繼ぐべければ、今更にいふまでもなきことなが
ら、公の逸事の一二を思ひ出づるまゝに書き記して、
世の鑑ともし、史人の料ともなさん。

維新の初に、「神武の古に復る。」といへる大義を定め
られしはこの公の輔翼の力にぞある。碩學野々口

*石見の人、
國學者。明
治四年歿
す。年八十。

隆正氏の説に、「建武中興の振はざりしは當時の摺紳シロシ
にその人なきによれり。源親房卿は學識ありて時
の帝の御覺もめでたかりしかど、その人の所見は延
喜天曆の跡に復るにありて、神武の古に復る事を知
らず。さてこそ公家・武家の間に隙を生ぜしなれ。」と
いへり。

故右府公は摺紳有職の家に生ひ立ちたまひしか
ど、夙に大勢を達觀して、王政に公武の別なきこと見通すことを
看破し、中興の實を擧ぐるために、「神武の古に復る。」と
いへる一大義を唱へたまへるは、これぞ明治の朝廷。

盤根錯節ニ
遇ハズンバ
何ヲ以テ利
器ヲ別カタ
ンヤ。

慶應三年十
月十四日。

文久二年九
月籠居落飾
の命を蒙り
采地なる山
城國愛宕郡
岩倉村に蟄
居せらる。

に人ありとは申すべき。その一大義は百揆庶政の
原動力となりて、藤原氏以來千有餘年間の盤根錯節
をばすべて破竹の勢を以て破りたり。世の人は「明
治の中興は五百年來の武門の政を破りたるなり。」と
思ふらめど、心ある人は溯りて天平以來の宿弊の更
に破りがたきを破られたることを知るならん。
徳川氏の大政を返上せし際には、公は譴を蒙りて
久しき間岩倉村に蟄居し、天日をも見たまはざりし
が、俄に召によりて夜中參内したまひけり。このを
り、公は一の大囊を携へて宮門に入りたまひしが、囊

京都の人。
勤王家。明
治五年卒す。
年六十三。

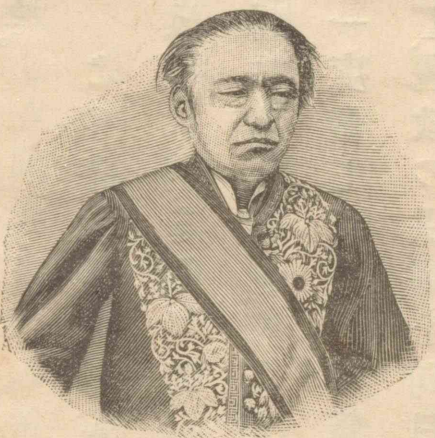
慶應三年十
二月王政復
古の大令下
る。

中の文書は皆公の蟄居中に計畫せられて、玉松操と
いふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なり
き。

この時、大勢をほ定まらずして物論紛々たるに、公
は俄に躬を以て責に當り、從容應答して、雄藩の主も
爲に容を改め、朝議大に決するに至る。而して大令
一度發して、外は將軍を廢し、内は攝關議奏・傳奏を廢
し、親政の洪圖を旬日の内に定め、後世動かすべから
ざる基礎を建てられたるは實に公の輔翼の方なり。
就中、復古の第三日に、禁闔に達文を掲げられて、女房

の請謁（エツ）を納る（ハ）ことを痛く禁止せられたるは、これぞ數年の宿弊を除き、將來のために一大美事を遺したる。とて、公の晩年に親しく物語したまひき。この一事は扇の要なりとは知る人ぞ知らん。

玉松操は一の偉丈夫なりき。平生聲色を近づけず、酒肉を嗜まず、書を読むを樂となし、夙に神武復古の説を抱きぬ。偶、公に知られて蟄居の一室を貸し



岩倉具視

與へられ、起居を俱にして畫策するところあり。公は玉松の功を推して「己の初年の事業は皆かれの力なり。」とまでのたまへり。薨去（コウ）の前年に、一夕ことさら余を召して玉松の履歴（クワシ）を物語したまひ、その人の功績を空しくなせそ。書きしるして後の世の語り継ぎの料にせよ。と慇懃（インギン）に仰せられけり。この夜、余は他の二人を誘ひてともに侍りしが、その中の一人はもれなく公の物語を筆に留めたり。己の功を推して人に譲りたまふこと、いとめでたし。

その後、公の朝廷に勧めまゐらせ、斷然と開國の國

是を執らるゝに及びて、玉松は其智の持はすべしと云ふ者姦雄に誤られたり。」との一語をいひ放ちて公の許を辭し、召されても應へだにせず、一室に屏風をたて籠め、その中にて讀書に日を送りけるが、功を論じ賞を頒かつ日に逢はずして世を去りぬるぞ歎かはしき。」とぞ公ののたまひし。公は蟄居していましながら、その家の裏の隠戸より人知れず大久保・木戸・小松・廣澤等の諸名士を引きて内外の大勢を談論せられ、この時すでに鎖國の非なることを悟らせられつるに、玉松は露ほどもこの事を知らざりけり。かれがくちをしく思ひつるも

*大久保利通
*木戸孝允
小松清廉
廣澤真臣

理なりき。

二二 岩倉右府その二

贊贊

維新後の、公が翼贊の功は明治の大御史と俱に後の世に傳ふべきなれば、こゝに書きつゝくる要なけれど、公は己の勞を露ほども誇りがほに人に語りたまふことなかりしほどに、史人もえ知らぬことぞ多かめる。世の人は明治二十年と二十二年との條約改正中止の件をば、何某の盡力にてとなりし、かくなりしなど、事々しくいひはやせど、この事のおこりは

十五年にて、公はあかず思し召すことありて、一方な
らず心を盡くしたまひ、そのをり一たび中止とはな
れり。されども、公は深く秘めたまひて、文書一箱ほ
どもあるを家に藏めて出したまはざりしかば、内々
の人ならでは知るものなかりき。これらは後の人
の鑑にこそ。

剛膽は政事家の第一要徳なりとぞ聞ゆる。公は
長袖の人とも覺えぬばかりに剛毅の徳を備へおは
しけり。「征韓の議、今にも蕭牆の内に變亂を見んと
する時に、陸軍將校の中にて武勇のきこえある一人

剛膽
蕭牆
このことには禍患
の近く門の
内にあるの故
に

隙隙

は公の邸に参り、客室に謁見し、一應二應議論の末、そ
の人怒れる眼、血を濺ぎ、毛髮倒に豎ち、脇差を左の手
にて鞘もたわむばかりに握りつめ、「貴殿もし意見を
枉げたまはずば御身のためにあしかりなん。」と言ひ
放ちつゝ、膝と膝との間一尺ばかりにまでつめかけ
たり。この時、公の家の侍ども次の間に控へ居て障
子の隙より窺ひつゝ、あはやと手に汗を握りたりし
に、公はすこしも動ずる色なく自若としてその座を
守りたまひき。とぞ内の人の物語りし。

公の畏きあたりの御覺殊にめでたかりしは世の

人の知る所なるが、大君の御爲とならば、われをおきて人はあらず。』と思ひたまへる、隠さはぬ、明き心の深かりしは、これぞ君臣水魚とも申し奉るべきか。雲の上の事は筆に載するも畏ければ、洩らしぬ。

公は大久保故内務卿と心交特に深くおはしき。岩倉村蟄居の折より、大久保卿は密々の往復しきりなりしが、公の身の上、心もとなし。』とて夜なく、年少き侍を遣はして守衛せさせつることありしを、公は知りたまはざりき。西南の亂平ぎし後、兩公の間に契りたまふ事ありしが、日ならざるに大久保卿の遭

哀し

難とはなりぬ。一日、公の物語に、世の人大久保の志を知りたらんには、いかばかりか哀しみ思ふらん。『維新のはじめ十年間は創業撥亂の時なりき。これより後、十年こそは内治を整理し、民利を進むる時なれ。』とて、將來のために大に計畫する所ありしに、料らずもかたみの言葉となりぬ。』とのたまひき。

公は夙に、開國の國是を唱へ給ひつゝ、又厚く國體の基礎を重んじ給ひき。晩年公の奏上によりて宮内省に帝室制度取調局を設けられしは、祖宗遺訓の貴きことを世に知らせん爲のはからひとぞきこえ

し。

公は勤儉の二字を大政の本として、ホヒツ輔弼に心を盡くさせ給ひき。又家を治むるにも儉約を旨とせられ、ウツ台鼎の高き位に上り給ひし後も、イハ岩倉村の蟄居の時を大臣の位忘れず。とて常に公達を戒めたまひけり。薨去の前、家範を作り、後の世まで守り文にせよ。とて子孫に遺したまひしが、その附録一篇は専ら奢侈と遊惰とを戒めたまひ、重き病の床にましくつゝ、親しく旨を授けて侍ふ人に筆執らせたまひし條にぞある。一門の人々が案文に調印せしは七月十五日に

公達

岩倉具慶*

して、薨去の前五日なりけり。今はの際に遺言ありて、己の墓石は父君の墓石の寸法に準へよ。とありきとなん。

公は日に夜に公の事にのみ心を碎きて、寸時も餘りの暇あらせたまはざりき。朝五時前には目をさまし、侍やある。と聲かけさせたまひ、今日は何某をば何時に召せ。次に何某をば何時に呼べ。又明日は何某に何時に來れ。何某に「夕何時に參れ。」と記して申し遣はせ。など仰せられき。多くの公だちは父君の代筆として、文かくことに忙しかりきとなん。

井上毅*

公の病に侵されたまひつるは明治十六年の春なりしかど、後より思へば、十五年のころより何となくあらざらん後の世の心づくしの節々を知る人に語らせたまひしことぞ多かりける。同年の冬、或人のもとに贈りたまへる書の末に、

さりともとかきやる浦の藻鹽草、

誰がおりましたちてかづきあぐらん。

とぞありし。先だつも後るゝも世の習とはいひながら、御國のために行末を思ひやられし公の心こそいとあはれなれ。

辭辭

公の平生の仰に、大臣たるものはその身の進退によりて節操を二つにすべきにあらず。維新の功臣、

岩倉具視筆蹟 (井上四郎藏)

晩節を全くせざるもの多きぞ口惜しきことの極みなる。われこそ躬を以て人臣の標準は示さめ。このたまひしが、病

重らせたまひし後、辭表を捧げん事を思ひ立ちたまひ、同僚の諸卿が支へ止めまゐらせしも聽き入れず、是非に。とて歎き請ひたまひしかば、上には忝くも誠

ある意ばへを酌ませたまひ、聞き届けさせ、厚き惠の御勅をさへ下したまひけり。かくと承りて、公はさしもに重き衾イゴを押し退け、涙に咽び、天恩の忝きを拜謝しつゝ、急小人の類ぎ家の子等を召し集ツトへられ、今日こそは病の輕きを覺えたれ。それ杯サツキまゐれ」とて酒を賜ひけり。人々、歡の色をなしたりけるが、さてその翌日に事重らせたまひぬるぞかひなき。今はの際まで、夢幻ゲンの間にも、公の事のみ心に懸けさせたまひ、なからん後の事までも人もて雲の上にきこえ上げまゐらせしこともありきとぞなん。

余は本末の序もなく思ひ出づるまゝに書きつゝけぬ。あはれ、この文讀まん人々よ、なき人のかきやりつる藻鹽草をいやつぎくにかづきあぐべき丈夫の伴となりて、公の地下の靈を百載の後にまで慰めよかし。(梧陰存稿)

二二 格言

舜モ人ナリ、我モ人ナリ。(孟子)

舜人也、我亦人也。

桃李言ハザレドモ、下自ラ蹊ヲ成ス。(史記)

桃李不言，下自成蹊。

水至ツテ清ケレバ魚ナシ、人至ツテ察ナレバ徒ナシ。漢書

水至清則無魚、人至察則無徒。

男子ハ當ニ死中ニ活ヲ求ムベシ、坐シテ窮スベケンヤ。後漢書

男子當死中求活、可坐而窮乎。

山中ノ賊ヲ破ルハ易ク、心中ノ賊ヲ破ルハ難シ。陽明全書

破山中賊易、破心中賊難。

涼涼

二三 良夜

徳富蘆花

良夜とは今宵ならん。今宵は陰曆七月十五夜なり。月清く、風涼し。

夜業の筆を闇き、枝折戸開けて、十五六歩行けば、栗の大木眞黒に茂れる邊に出でぬ。其の陰に、潜める井戸あり。涼氣水の如く闇中に浮動す。蟲聲蟋々。時々白銀の雫のポタリと墜つるは、誰が水を汲みて去りしにか。

更に行きて畑の中に佇む。月は今彼方の大竹籬

を離れ、清光溶々として上天下地を浸し、身は水中に立つ思あり。星の光何ぞ薄き。鎮守の森も淡くして煙と見ゆめり。靜に立ちてあれば、我が側なる桑の葉、玉蜀黍の葉は、月光を浴びて青光りに光り、櫻欄はさやくと月に囁く。蟲の音繁き草を踏めば、月影、爪先に散り行く。露のこぼるゝなり。藪のあたりには頻りに鳥の聲す。月の明きに彼等もえ眠らぬなるべし。

開けたる處は、月光水の如く流れ、樹下は、月光青き雨の如くに漏りぬ。歩を返して樹陰を過ぐるに、燈

火の影、木の間を漏れて、人の夜涼に語るあり。

枝折戸閉ぢて、縁に踞する程に、十時も過ぎて、往來全く絶え、月は頭上に來りぬ。一庭の月影夢よりも美なり。

縁に大なる楓の如き影あり、八角金盤の落せるなり。月光其の滑なる葉の面に落ちて、葉はさながら碧玉の扇と照れるが、其の上にまた黒き斑點ありてちらく躍れり、李の樹の影の映れるなり。

月より流るゝ風、梢をわたる毎に、一庭の月光と樹影と相抱いて跳り、白ゆらぎ、黒さゝめきて、其の中を

歩する身は、是、無熱池の藻の間に遊ぶ魚にあらざるかを疑ふ。(自然と人生)

○

山家夏月

伊東祐命

山里の笕ケシの水に涼しさも

あふれて見ゆる月の影かな。

二四 動植二物配合の美 三 好 學

植物と動物との間には自然の關係を持つて居るものが多くある。これは植物の生存に必要なため

のもあり、動物の生存に便利なためのもあり、又動植二物が互に相利するため自ら關係が出来て居るものもある。又それほど深い關係でなくても、或植物と或動物とは、多く同一の場所にあるために、其の一方を見ると、直に其の他方を聯想することもある。其の外種々の原因からして、動物と植物とは理想的に配合されることも随分多い。

花と昆虫との關係は至つて親密なもので、花は昆虫の媒介によつて、花粉の傳達を謀るのである。その媒介をさせるためには、花の形や色が奇麗になり、

又は佳い香がして、遠方から知ることの出来るやうになつて居る。それで美しい花があると、必ず昆蟲が其の傍に来る。尤も蟲の來る時刻は朝晝又は夕夜等様々である。又天氣の工合、氣象の情態などによつてもかはる。又季節によつて、春來る蟲、夏來る蟲、秋來る蟲といふ風に違ふのみならず、花によつて、亦それ〴〵特別の蟲を呼ぶこともある。

これらの昆蟲のうちで、晝來るものは蝶・蜂・虻などの類で、時としては蠅や蟻も花に這入ることがある。夕方から夜にかけて來る蟲には、蛾の種類が多い。

これらの蟲の中で、一番目立つのは蝶・蜂又は花虻の類である。

春先、菜圃に行つて見ると、白い蝶や黄色な蝶が彼方此方に飛んで居る。蝶と菜の花とは何時でも聯想されるもので、春さきまだそんなに暖くないころであるから、菜の花のやうな黄色な、淡泊な花に同じ色又は白色の蝶が來て飛んで居るのは、自ら季節にかなつて居るやうに見える。それから段々氣候が暖になつて來ると、隨つて色々の花が咲き、また様々の蝶が出る。夏の初、花菖蒲の咲くころには、揚羽蝶

や、黒い色の、大きな、立派な黒揚羽蝶などが花を尋ねて飛んで来る。花菖蒲のやうな色の濃い、大きな花は、斯様な立派な色をした、大きい蝶と能く釣り合つて見える。藤の咲いた時には、虻や蜂も澤山来るが、とりわけ、大きな、黒い色をした、まるくまばちが必ず来て、長い總形の花の周圍にぶん／＼鳴いて居る。其の外、牡丹芍薬石竹紫雲英蒲公英芥子牽牛花芙蓉菊など、種々の花に種々の蟲が来る。又、八角金盤の花の咲いたときに、注意して見ると、色々の蟲が来て居る。此の花は東京邊では十一月の初頃から咲く

ので、花は至つて小さく、白くて、目立たないが、暖い日には、澤山の蜂や虻や又は蠅などが来て、蜜を嘗めて居る。其の有様はなかく、賑かなものである。

昆蟲以外の動物と植物との關係は、それほど親密ではないが、又種々の原因から自ら配合されて居るものがある。例へば、果實が赤く色づいたときには、それを啄みに来る鳥類又は獸類がある。又稻の黄ばんで實のつたときには、雀が來たり、麥の熟した頃は、雲雀が來たりする。其の外、かしどり、鶉、栗鼠、貂などが木の實を取りに來たり、草の實を喰ひに來たり

する。即ちこれらの動物と果實とは一種の關係があつて、動物に果實の中の旨い部分を喰はせて、中の堅い種子を方々へ散らさせる目的であるから、丁度花と蟲との關係のやうになつて居る。それで、果樹とこれらの動物とは、自然に配合された美觀を形づくることになる。

斯様に、果實や花の場合には、植物の生存に必要な爲に自然と配合が出来て居るのであるが、其の外の場合には、それほど深い關係はなく、唯動物が植物を色々の目的で利用して居ることから、自然其の間

に聯想の起るのである。例へば、水邊にある植物は濕氣又は水を好む動物が利用することになる。彼の鷺などは河邊にある柳の梢にとまり、又螢も柳の葉に好んでとまる。又雨蛙・蝸牛なども水邊の植物や又は濕つた處にある草木の葉・莖に乗つて居る。蒲・莞・燈心草の類が池の中に生えて居ると、赤蜻蛉・燈心蜻蛉などが時々來てとまる。即ちこれらの場合も、水邊の植物と特別の動物との間に自ら關係が出来て居るのである。雁・鴨などが蘆のうちに入り、金魚や鯉が金魚藻・菱・黒藻などの間を遊び、水澄が蓴菜

萍ヒナギサなどの浮いて居る水面を走り、香魚イサナが急流を上る場合でも、皆水中又は水邊の植物と自ら配合が出来て居るやうに見える。又昆布や荒布が波濤に漂つて居る間に、大きな魚蝦などが來て、其の間を泳ぐ有様も一種の奇觀である。

鳥類が種々の植物に來て巢を造ることは普通であつて、或鳥は或特別の樹木を擇んで來る。又巢を造らなくても、或樹木には或種類の鳥が來て度々とまることがある。これにも又色々の原因があるのだ、其の鳥の來る時節と其の植物の花や實のある時

節と丁度同時であつたり、又偶然にも或鳥が一の樹木に能くとまることが見たりして、それから其の木と鳥との間に聯想をつくるやうになつたものである。從來、我が邦で繪畫、詩歌などに現れ、又種々の美術品、工藝品に上つて居る動植配合の例は色々あるが、其の普通なものには梅に鶯、松に鶴、枯木に鳥、柳に鶯などの類で、これは自ら其の植物と動物との形態性質等に於て適合する點があるか、又は偶然の場合からかく配合を取つたのであらう。

すべて、これらの場合には動物を單獨に考へては

自然の情態を現すことが出来ず、又植物も自分に多少関係のある動物を副へられると、天然の特性が強く現れて来る。つまり、半分はわれくの想像から、半分は實際の關係からして、動植二物の配合の美が成り立つものと思はれる。(植物生態美觀)

蝶

香川景樹

蝶よ、蝶よ、花といふ花の咲くかぎり、

汝が到らざるところなきかな。

香川景樹一編新十郎
桂園と号す 鳥取の人、京都
に住す 和歌の好むこと一徹と
聞き門人甚か多し
天保十四年没す

二五 露月に答ふ

正岡子規

存懐病を患ふは角法縁れなきにござる由
嗚呼困却と存じ候は身の上承り此心中
茶入り候

小生も貧家に生まれ殊に身弱虚弱なるため
常に不自由候に相辱し候へども天運の廻り合せ
とまざるが難儀も致さば漸く今はまでござりつけ
申し候病態についても一時は自ら神種をいたため
候へども大患後は全く相あきらめ候様にお交りい
せ男を大親し心狗を潤とし不屈不撓の精

横着 職 歎 頃

神を以てて六までも横着にせ渡るるを軒
宴と存し候ふ遇の爲に厭さ的思想を起し
職柄の間に不幸を歎ずるは悟らんやして未だ
悟らざるものと存し候吉道日に危く人事月に
非あり我に於て何かあらん彼は彼なり我は我なり
ふ運歎ずるは須ひず不幸愁ふるを要はるる
落しやして一生を終ふは僅く悟る者なり
ふ運或ふ遇とせむ不幸を不幸やせむ是非
とよし吉凶を等しくし自ら此は俗界に立ちて
己の素志を貫く者即ち是大悟徹底的の人物

徹底的

感 歎

其は誤るべきものと存し候小生頃者其感
訪あり此頃までに申し添へ候
書解存眉の首に譲る候以上

九月十日

記

露月見

此頃玉を論然る候

金は只今此入用又は此頃京校にてよろしき
美し至急此入用ならば其の旨寸此根不
されたく候
小生幼くして父に於れ母の手に人と爲る幸に

女の健康なるが為に獨り自ら憂ふ然れども
よる年波の是れなくも今は復昔日の女に
非ず

何をせん母瘦せたまふ秋の風

(子規書簡集)

二六 歌話

中邨秋香

賀茂真淵

延享某の年の秋、江戸大風雨にて、市中處々の人家
破損しけるあけの日、賀茂真淵翁の許に、門人某見舞

に行きけるに、翁の家も夜來の風にて屋根大方吹き

掃のりゝあゝまゝも
ふしゝゝ二枚ゝゝ
あつてゝゝゝゝ
月乃あゝゝゝ
ま
い
あ
あ
あ
あ

賀茂真淵筆蹟 (東京帝室博物館藏)

まくられ、日光席にさ
し入り、屋根板狼藉な
る中に、翁は平常に異
なるさまもなく、机に
よりて沈思吟詠せり。
「烈しき風雨にも候ひ
しかな」といふ聲を聞
き、始めて某の來れる
餘談に及ばず、この嵐



にて一首出で來ぬ。」とて、書きて示しける歌、

野分してあがたのやどはあれにけり、

月見に來よと誰にいはまし。

小澤蘆庵

天明の火災にて小澤蘆庵が家危くなりし時、翁、人に告げて「他の品は皆焼きても苦しからず、只書籍

呼子名

耳、そのやももろくてよふことあり
うろたうともねをやつらん書屋

だけは一冊も多く出したまはれ。」とて、自身も年來の

小澤蘆庵筆蹟
(東京帝國博物館藏)

小澤蘆庵 名は玄中 通稱帯刀、今在る村門京和元年歿す

*田安宗武の第七子、後出でて白河の城主松平定邦の嗣となる

鈔録本を風呂敷包にし、これを負ひて太秦なるしるべの家に避けぬ。この火にて内裏の炎上せしよしを聞き、いたく歎きて、翌日未明に太秦を出で、内裏の焼跡を拜し奉りて、

今朝見れば焼野の原となりけり、

これや昨日の玉しきの庭。

白河樂翁

*白河樂翁公年十二にて猶田安の邸におはせし頃、麻布鳥居阪なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類焼しけり。大火といふまでにもあらざり

しかど、焼死せしもの多かりしかば、
この火事は人の命をとりぬる阪

これより上のとがはないせん。

此歌の

白河樂翁筆蹟
（偉人史叢）

（叢史人偉）蹟筆翁樂河白

と落首せる者あり
けり。近侍の人々
興じ笑ひて、いかに
もよく詠みたり。」と

評し合ひけるを、君聞きたまひて「余が詠まんにはさ
はいはじ。」とありければ、奥醫師の某「さらば、何とか詠
ませたまふ。」と問ひ参らするに、「言はじく。」とすまひ

たまふを、強ひて問ひ参らせたりしかば、「四の句を、怪
我の事なり。」といふべきなり。」とあり。一句の事にて
一首の意味を全く顛倒せしめ、過の已み難きに出づ
るを明らかにせられし事、まことに「梅檀の二葉。」とぞ
いふべき。（新説歌がたり）

二七 忘れられぬ人物 新渡戸稻造

ながらく外國に遊學して、さて如何なる利益があ
つたかと顧みると、えらい人間に逢つた事だ。偉い
とは強ち人爵の高いのを謂ふのではない。天爵の

高い、前後左右何れから見ても人並以上に發達した人物を云ふので、残念ながら歸朝後同胞の中には、滅多に發見する事が出來ない。

勿論、日本にも世界に誇るべき専門家はある。併しこれは多く一方に偏した人物である。偉い政治家がある。併し政治家連は英雄氣取で、概して素行が修らぬ。頗る鋭い才子がある。さういふ人に限つて學問が薄つべらである。温厚の君子人がある。さういふ人は大抵融通がきかぬ。歌が詠めれば字が書けない。詩を作れば田が作れない。何も彼も

人並に出來て、其の上に何かに於て羣を抜く人格は余が輩の眼界が狭いせゐるか、同胞の中には殆ど見當らない。

専門の學に長じて居りながら、普通一般の知識に通じ、事務を委ねれば銀行の頭取或は地方の知事位は御安い御用、音樂の聽き分けも一通り出來る、美術を評すれば歐羅巴の畫工は云ふも更なり、光琳・北齋歌麿の鑑定位は出來、政治を談ずれば、少なくとも二流の新聞記者よりは遙に見識があり、己の身はよく修つて道德は高いが、さりとて人を責めず、世を罵ら

ず、子供には子供の如く、書生には書生の如く、軍人に對すれば軍事を談じ、商人と語れば商業を論じ、農家に交はれば作物の話も出来る、一口に云へば大きく常識の伸びた人は、英米に最も多い。是が留學中の最大の賜物だ。

余輩は折々病のために床に就いたり、或はする事が意の如くならないだりして、動もすれば、失望の淵に陥らうとすることがある。その時に、これらの人が目の前に現れる。恰も、六合暗黒にして、心も心ならざる時、忽ち燦爛たる星の光を認めたる如く、再び勇

氣を取り直すのである。だから今日でも外國へ行く人が「何か心添をしてくれ」と求める時、僕は必ず「良い紹介を求めて、偉い人間に逢つて來給へ」との一言を始終繰り返すのである。（歸雁の蘆）

二八 禁庭の野分（皇后陛下御作）

朝露のひるまはさしもなかりし空の、暮過ぐる頃よりかきくらし、夕月の光も見えず。とかくするほどに、雨いたく降り出でて、ほとり近く語りあふ人の聲さへ聞きわかぬばかりになりぬ。閨（かみ）に入りにし

頃までは、なほ雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに雷さへ鳴りはためきて、手枕の夢現とも思ひ定めぬるひまなく、稻妻のきらめきわたる、いとすさまじ。曉がたには雨はやみて、風は烈しう吹き出でつゝ宮の内もゆるぐばかりなるに、いとゞ目も合はず。

上には、畏くも民のためとて遠き境に出でましつるほどなれば、いかなる行宮にましく、て、この風の音に御心を悩ましたまふらん。皇太后の宮にはいかにおはしますにか。宮たちも驚きやしたまふらん。思ひ續くるほどに、夜も明けたれど、いまだ風静

まらで、いづこもおろし籠めたる、いとものむづかし。軒近き栗の枝の、實を結びたるまゝに、吹き折らるゝ音いと烈しう、御階の下の芭蕉も筒井の傍なる柳も皆折れふしぬ。今をさかりと見えし眞萩も名残なう散り亂れたる、いとさびしう見ゆ。宮の内さへかく荒れぬるを、まして、まばらに瓦おきたる賤が家居などは、たふれたるも多からんなど思ひやるも、すゝろにかなし。「おしなべて、みのりよし」と聞きつる千町田の稻も吹きそこなはれつらんやなど思ひつゝ、
國のため、風のぬ科戸の神も心して

稻葉の上はよきて吹かなん。
 なほ心苦しう思ふほどに、いつとなく風静まりて、
 雲間の日影まばゆくさし出でたる空の氣色に、おの
 づから人の心もおちゐて、烈しと聞きし嵐の音も夜
 半の夢となりぬるなるべし。

二九 加藤清正の告別 大町 桂月

八道の山よ、いざさらば。年の七年戈執りて、
 踏み荒したる日の本の 武夫は今歸るなり。
 釜山の浦のあきふけて 空も時雨しぐる、夕間暮、

波路遙に帆を揚げて 汝と今や別かるなり。
 知遇の恩に身を捨て、 四百餘州をわが駒の
 蹄に蹴んと勇みしも、 覺めて儚なき夢なれや。
 我を知りにし太閤の、 世になき後は、誰が爲に
 千里の外に戈執りて、 異境の山にいくさせん。
 恥をしのびて故郷に 歸るも、後に死なんため。
 主君の家の行く末を 思へば、重き命なり。
 嗚呼、太閤世を去りて、 よつぎの主は幼なし。
 石田・小西の小人ばら かならず事を誤らん。
 わが幼時より育まれ、 恵にあびし豊臣の

家を護りて死なん身の、永くは住まじ世の中に。

跡に見捨つる

ものゝふの

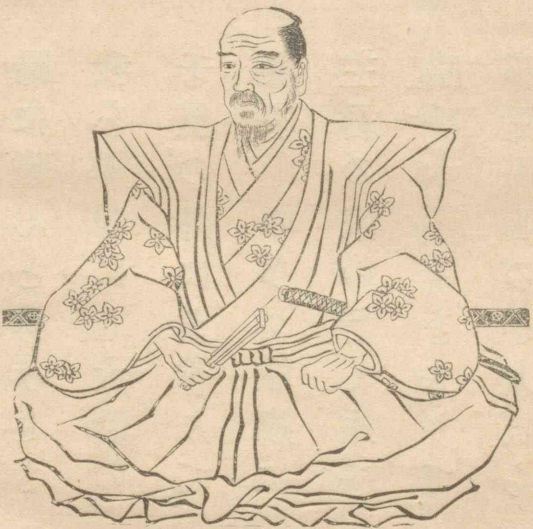
亡き魂、もしも

知るあらば、

三途の川や六道の

辻にしばらく

我を待て。



(藏寺國本都京) 正 清 藤 加

是を限の見をさめに、今一度と見返れば、

波音すごく、雨荒れて、野山は霧に朧なり。

八道の山よ、いざさらば、國の譽と戦ひて

花と散りにし日の本の 男子の骨を護れよや。

(黄菊白菊)

三〇 北京

市村瓚次郎

北京は清國の首府にして、直隸省順天府にあり。

東經百十六度二十八分、北緯三十九度五十七分に位

す。西北は一帶の山脈を擁し、東は遙に渤海を控へ、

南は渺漠たる平原にて、千里極なし。舊時は南方或

は東南の地方よりこゝに赴くもの皆陸路によるか、

塘沽

或は白河を沂ヤカホるかなりしが、今は鐵路已に開け、一條は天津を経て塘沽タルクに出で、一條は保定府を経て、遠く湖北省の漢口に達す。前者は滿洲の鐵道と連なるものにして、後者はいはゆる京漢鐵道なり。城内の人口は或は百萬、或は二百萬と稱すれども、實際は五六十萬に過ぎざるべし。

京城を内城と外城とに分かつ。内城の周圍は六里許にして、堞壁を繞らす。その高さ三丈五尺餘、厚さ五丈より六丈に及ぶ。皆煉瓦を以て積み重ね、壁上、數輛の馬車を並べ驅ることを得べし。四方に九

金鰲

門を設く。門樓の高さ皆五丈餘、宏大壯嚴を極む。外城は内城の南に附きて、東西に長く、南北に短く、ほぼ長方形をなせり。その周圍四里餘あり。堞壁は内城に比すれば、稍小なり。門樓の規模も亦内城の諸門に及ばず。

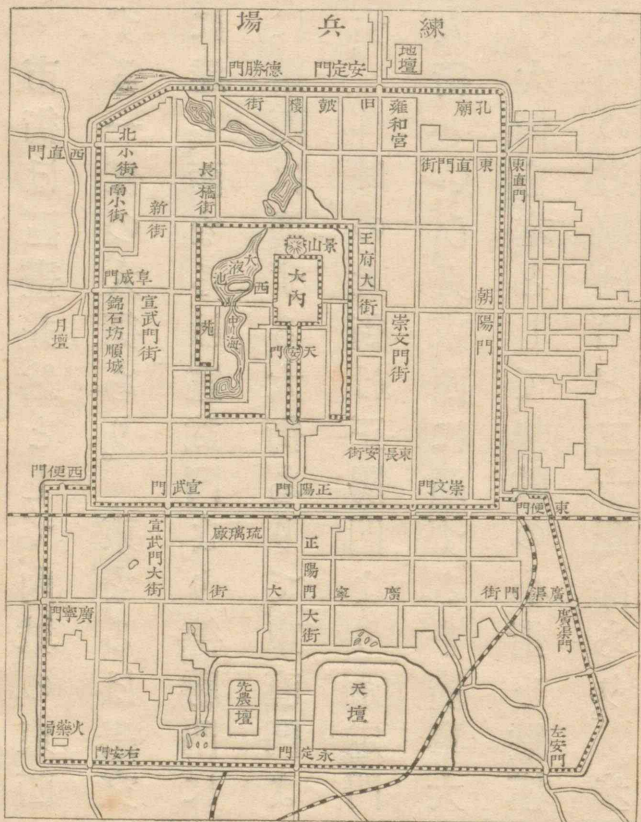
内城の中央を皇城とす。周圍一里十町餘、黃瓦、朱壁の女牆メノカキを繞らす。その高さ一丈八尺、厚さ六尺前後なり。皇城の西邊に廣大なる苑囿エンウあり。西苑と稱す。中に大液池ありて、瓢の形をなす。池の中央に、大理石にて造れる橋梁を架す。これを金鰲、玉蟬

参差—物大の揃は状に
不該

といふ。又池の北方に瓊華島といふ島嶼あり。島内樹木多く、丘上に石塔ありて、遠方より望むを得べし。池の西岸の地には、宮殿樓閣の散在せるもの少々ならず。夏時、苑中に至れば、池内の荷花亂れ開き、岸上の楊柳茂り合ひ、清風徐に來りて、塵慮の頓に空しきを覺ゆ。瓊華島の東方に當りて小山あり。これを景山といふ。高さ十五丈。北京城中にて最も高き地なり。山上に小亭あり。これに倚れば、紫禁城を眼下に瞰ることを得べし。此の内に、宮殿樓門、参差として散列し、黄屋朱壁、日光に映じて燦爛たり。

きらきらと赤やぐら

精巧—即ち巧
なること



北京の圖

養心殿は現今、皇帝の起居せらるゝ處にして、其の北なる翊坤宮は皇太后の坐臥せられし處なり。宮殿の建築は精巧の趣に乏しと雖も、宏大の點に至りては我が國の舊來の建築

の容易に及ぶ所にあらず。

市街は區畫井然として、内城の東西に、各南北に通ずる一條の大街あり。正陽門より安定門東なるは崇文門より安定門に達し、西なるは宣武門より德勝門に達す。又北邊に東西に通ずる大街ありて、東直門より西直門に達す。外城の大街は正陽門より永定門に至るを正陽大街といひ、又東西に通ずるを廣寧大街といふ。此の大街を本として、無數の小街を縦横に設けたり。大街の道幅は殆ど二十間餘あり。歩道と車道との別はあれど、修繕行き届かずして、自然の頽敗に任せ、

雨ふれば泥濘車軸を没し、天晴るれば塵埃空を蔽はんとするを常とせしが、近年大に之を修築せり。家屋は大抵煉瓦より成りて、二階あるもの少なし。その新なるものは、門扉、招牌、金碧熒煌として人目を眩せんとなす。然れども、其の舊きものに至つては、塵埃堆積して、觀るに堪へざるもの多し。城内の最も繁華なる處は、内城なる東四牌樓の附近、外城なる正陽大街の北部にして、百貨輻湊し、商賈羣集す。正陽大街の西方なる瑠璃廠は書肆、骨董鋪、軒を並べ、縹帙、畫卷、閣に滿ち、玉器、銅器、磁器、書畫の類、眞贋並び陳す。

道路を行く大官は轎子けうしに坐して出入するを常とすれど、中流以上の人は多く騾車ろしやに乗りて往來す。近來は、人力車大に行はれ、到る處の街上に客を載せて走るを認む。

内城にて觀るべきは孔廟及び雍和宮なり。孔廟は内城の東北隅にあり。大成門を入れれば、大成殿あり。孔子及び十哲じふてつの靈位を安んず。殿前に清の歴代皇帝の建てたる牌樓相並び、門外に進士題名の碑多く、老檜森鬱、夏猶寒し。雍和宮は喇嘛教ラムカウの伽藍カランにして、規模甚だ大に、僧侶の數三四百人に過ぐ。外城

顔淵カウ 冉伯牛ニ 仲弓チュウ 宰我サイ 子貢シ 冉有ニ 季路シ 子夏シ

伽藍 精舎 佛道 修養 所

籍田 天子 躬自 耕之 籍田也

に於ては、天壇先農壇あり。永定門内の大路を挟みて東西に並び立つ。東を天壇と稱す。皇帝、天を祭る處。西を先農壇と稱す。皇帝の農を祭り、籍田に耕す處。面積甚だ廣し。安定門外に黃寺あり。喇嘛教の寺院にして、境内甚だ廣けれど、堂宇頽敗して觀るに堪へず。北京を距ること一里許の處には頤和園あり。皇太后離宮のある處なり。樓閣の萬壽山に倚つて昆明湖に臨むもの甚だ壯麗なり。その近傍に、玉泉山ありて、茂林清泉、幽邃閑雅の勝に富む。北京は夏期、日中頗る暑く、華氏百度以上に上るこ

北京 暑く かく

とありと雖も、夜半より拂曉にかけて稍冷氣を感ず。或は雷雨一過、炎塵を洗ひ去ること少なからず。冬期は寒冷甚だしく、朔風、砂塵を飛ばして、一天濛々たることありと雖も、空氣乾燥して、降雪多からず。一年の中最も爽快を覺ゆるは秋十月の頃なるべし。日光愛すべく、風意寒からず。夜間、一天の月色凜として光芒人を射、雁聲嗷々、頭上を掠めて過ぐる時は、人をして横槩賦詩の情を起さしむ。(中等國文讀本)

三一 天理と人道

福住正兄

横槩 牙ヲ横ニシ。 横槩賦詩 一 古唐書北齊 傳曰 曹氏文 鞍馬 問 爲 文 住々 横槩 賦詩 固 一 世之雄也 あり

二宮尊徳翁曰く、世界は旋轉して止まず。寒往けば暑來り、暑往けば寒來り、夜明くれば晝となり、晝過ぐれば夜となる。又萬物生ずれば滅し、滅すれば生ず。譬へば、錢を遣れば品が來り、品を遣れば錢が來るに同じ。寢ても覺めても居ても歩いても昨日は今日になり、今日は明日になる。田畑も海山も皆その通り、こゝにて薪を焚き減らすほどは山林にて成木し、こゝにて食ひ減らすだけの穀物は田畑にて生育す。野菜にても魚類にても世の中にて減るほどは田畑・河海・山林にて生育し、生まれたる兒は時々刻

刻に年がより、築きたる堤は時々刻々に崩れ、掘りたる堀は日々夜々に埋まり、葺きたる屋根は日々夜々に腐る。是、即ち天理の常なり。

然るに人道は是と異なり。風雨定めなく、寒暑往來する此の世界に、羽毛なく、鱗介なく、裸體にて生まれ出て、家がなければ雨露が凌がれず、衣服がなければ寒暑が凌がれず。こゝに於て人道といふものを立て、稻を善とし、莠を惡とし、家を造るを善とし、破るを惡として、人の爲に立たてる道なり。由つて人道と云ふ。

天理より見る時は善惡はなし。其の證には、天理に任する時は皆荒地となりて開闢の昔に歸るなり。如何となれば、是、即ち天理自然の道なればなり。夫、天に善惡なし。故に稻と莠とをわかたず、種ある者は皆生育せしめ、生氣ある者は皆發生せしむ。人道はその天理に順ふと雖も、其の内に各區別をなし、稗莠を惡とし、米、麥を善とするが如き、皆人身に便なるを善とし、不便なるを惡とするなり。こゝに至つては天理と異なり。如何となれば、人道は人の立つる所なればなり。

人道は、譬へば料理の如く、三倍酢の如く、歴代の聖主賢臣、料理し、鹽梅して拵へたるものなり。されば、ともすれば破れんとす。故に政を立て、刑法を定め、禮法を制し、やかましくうるさく世話をやきて、漸く人道は立つなり。然るを天理自然の道と思ふは大なる誤なり。能く思ふべし。(二宮翁夜話)

三二 四季の月

石川依平

うめ咲くそのに かすみつゝ、
みねのさくらの はなぐもり、

くもりもはてぬ おぼろ夜の
つきこそはるの ひかりなれ。

まだしきほどの ほとゝぎす、
はつね待つ夜の まくらより。
馴れてすゝしき つきかげに、
ねやの戸さゝで 明かすなり。

きりの葉わけに かげ見えて、
あきとほのめく ゆふべより、

まじしー本、未だ其の期は多き
早月未だ鳴きも甚なりあは
けき、まじしー程の起り
聞かぬや、

明明明明明明
 治治治治治治
 四四四四三三三
 十十十十十十
 二二一七六六
 年年年年年年
 三二二二二二
 月月月月月月
 廿廿廿廿廿
 三三五二九八
 八二九六五
 日日日日日日
 訂訂訂訂訂訂
 正正正正正
 十十十十十
 二二一一一
 版版版版版
 發發發發發
 行行行行行



本館發行
 賣切等
 之教科書
 業に課
 是常に
 御差支
 多數の
 節は直
 接御注
 文被下
 候は直
 に御送
 附可致
 候

印刷者 矢島一三

發行所 光風館書店

發行者 上原才一

編者 吉田彌平

東京市神田區裏神保町六番地

東京市神田區裏神保町六番地

東京市神田區裏神保町六番地

(電話本局二千三十九番)
 (振替附金口座東京三二七番)



師範國文教科書本科用卷一
 正價各金參拾五錢

師範學校
 國文教科書本科用卷一終

立ち待ち、居待ち、
 待ちとりて、
 ながめけん。
 木の葉ふりしく
 やまのはの、
 しぐれにくもり
 しもにさえ、
 ゆきに照りそふ
 つきかげを、
 などすさまじと
 おもふべき。(今葉歌集)

